

作
譯
李寄持扇



農男の清掃りたるが家那山の古

よ人の形はこくやの清のころこく
ありこきと農男と林とみ砂と
えゆる年もあり又とえゆる年もあ
りあの家とこくえゆる年と必
五穀熟也

秋ハ織万物と織迫して便り
時成こあさハ明清明之成

ハハあさハ明あさハ通也万
物秋はよて冬落してかか

夷則ハ夷ハ傷

立秋圃大

處暑圃立秋の

七月孟秋。上秋。新秋。首秋

蘭秋。蘭秋。桐秋。肇秋

月。女郎花月。親月。夷則月。ふ

一葉柳ちる

諸寺施餓

新吉

原燈籠

洗車雨

北野御手

水

机あ

硯洗ハ

七

日節供

秋

序ハ毎日なる物也れとも一年
の内節によき事を御代に
○七

牽牛織女二年一令昏霄
三星

夕の令節より多き夕なり
○牽牛星。織女。二星の
いそひ星。河鼓。平女。と上界を

いそひ星。河鼓。平女。と上界を

ふく秋さり姫。いそひの姫。さ

う小姫。百子姫。絲織姫。お

不姫。梶の葉姫。以上いそひ

もいそひ。あふこのかきけきハ

いそひ。あふこのかきけきハ

星合彦星。星祭。星の手向

七夕つめ。いそひの女。いそひ

の川。銀河。曬衣。夕。七夕。乞願

夕乞願。巧ハ。いそひの女

いそひの女。いそひの女

いそひの女。いそひの女

いそひの女。いそひの女

いそひの女。いそひの女

いそひの女。いそひの女

いそひの女。いそひの女

いそひの女。いそひの女

いそひの女。いそひの女

いそひの女。いそひの女

いそひの女。いそひの女

いそひの女。いそひの女

いそひの女。いそひの女

のこころを日の節句ハ瘧と除く為
なりこのあつて日親族索麵とお
くり互に **秋さう衣** 衣星の星て
日さう衣
食まると

左小舟妻迎船 織女牽牛
とむらひよ出

貝穂船妻 船牽牛
の乗

りて来る舟 **七種の船** つらつらの
宝を七不

穂てま向る **星の薫** 机の上此火
とりよ終枝

物あり **梶の葉** 七夕よハ七枚け
梶の葉よま向

のちをくまふ色の糸よまきて **短**

冊竹賣 その俗星よま向るとて
ふ色の紙と寄て短冊と

露 あとり草ハセクのちをま付る
草の葉のちをま付るこ

飛鳥井の鞠 七夕日花名井都
波のち家蹴鞠の

舎あり **池の坊立花** 七日京六
角堂方丈

て立糸を真り且立糸ハ南位職寄

本願寺筆花 七日
東西

逆の峰入

文

珠會 八日仁明天皇の御宇より
始て東宮西宮にて行はる

六道参 九日。迎鐘。又條の末北建
仁まの南ふある六乃の珍

楨賣 そ九日諸
人六乃

清水千日詣 十日を日亲
詣され八平

秋

五十八

より十五日に至りて各
祖考の墳墓に参る ○中元 十
五

日正月と上元と十月と下
元とす日を佳節とす ○八幡

安居の頭 十五日安居の臥八大経
堂の塔山の井くくハ十二

月十五日 ○三井寺女詣 十五
日岩

ハ女人悲制の山方れハ七日
一日ハ女の参りてとゆふ ○夏書

納 仏考四月十六日より七月十六日
五り一亥九旬の間ハ経と書写

モ後見と堂塔伽藍ヲ納 ○夏解
ハ二界万灵ヲ回向スル也

草 修尼解之の日縁と以節と束
テ檀越ヲ遣ふる也と夏解
ハ又吉祥

ハ又吉祥 ○解夏 十六日僧徒
ハ又吉祥

終り ○善福寺童相撲 十
五

日江戸麻布雑色町ニあり麻布中
号ニ世俗寄寺と麻布面と号ニ七

月十八日ハ関山了海上人の忌日
之日モ内々ニある処の麻布持現の

社ありてを撰あ ○水灯會 十
六

日城州宇治黄檗山万福寺の
僧徒宇治川ニ出テ修行也 ○照

冥 十六日沈迷者 聖具を送る
ハて川田ア麻栢と燃を束

の俗ハを日ちれハ十
五日ニハハモある ○施火燎

○大文字火 ○鳥居火 ○船形の火
○妙法の火 羽後外ノ山ニ出テ

の形ハ薪木とつて焼之麻
ケ谷大文字此筆画甚ナリ ○經

水流 十六日天皇ニ鳥井ニあり
日経木の表ニ亡人の戒名注

名を記シ鳥井の水
と名向吊ふナリ ○閻魔参 十
六

日閻羅王ハ地獄の主鬼也の忌日
ナリよりて参ると日と縁日とす

祐天寺千部 十五日より廿五日
ハ明顯山祐天寺ハ

江戸同里ニあり岡
ハ六祐天大僧正ナリ ○衝突入 昔

法云とてつと入とハ家ハ於て
是物或ハその家ハ嫁妻妻ナリ

為らんとすと思ふ物と云ふ事あり
入て志す見く之近に於て野州
山田、幸一ゆゑ母の人山田
のつと入てしん見心十六日あり ○松ヶ

崎題目踊 十六日松ヶ崎妙泉寺
書のおりて男女
ちやとり歌目よりと
つけて志す踊る ○鷹の持

出 四月は羽拔るるを養ひ養主
て七月中旬羽毛とせまると時捕
とせまると十六日捕とせ

雁の山 雁の山
まこく藤原草と出たり

別 是ハ七月廿五日之鷹の采
をまて父母よりとせまると

鷹 ありとせまるとて来り人
別 別とせまると細きけのこり

屋勝 鷹の毛とせまると羽翼既
侍て候と出ると時勢ひ候と候

初鳥狩 初鳥狩
初雁狩鷹 初雁狩鷹

鳥と祭る 慶忌の候の中鷹
と食ハと用て始て戮

鳥と祭る 慶忌の候の中鷹
と食ハと用て始て戮

鳥と祭る 慶忌の候の中鷹
と食ハと用て始て戮

御霊の御出 十
の令と眼ふ

宗祇忌 宗祇忌
之をり八月十八日

宗祇忌 宗祇忌
之をり八月十八日

宗祇忌 宗祇忌
之をり八月十八日

宗祇忌 宗祇忌
之をり八月十八日

宗祇忌 宗祇忌
之をり八月十八日

宗祇忌 宗祇忌
之をり八月十八日

宗祇忌 宗祇忌
之をり八月十八日

宗祇忌 宗祇忌
之をり八月十八日

宗祇忌 宗祇忌
之をり八月十八日

宗祇忌 宗祇忌
之をり八月十八日

宗祇忌 宗祇忌
之をり八月十八日

○牽牛花 一名假君子 又朝白ともふ ○女郎

花 花のつぼみ ○茶の花 花のつぼみ

○仙翁花 一名紅梅草 ○観音

草 吉祥草 ○翁草 本字は白

○藥師草 牙切

草 又青葉ともいふ ○益母草

○鳳仙花 金鳳

○施覆花 野徑の

○野菊 ○鬱金の

花 紫の芭蕉も似たり ○茗荷の

花 ○灸花 小室用く赤白く肉

○曼珠沙花

○燈籠 一名あか

○蕁麻子 和名

○木桂 俗名をえ

○薏苡仁 仁ハ穀のど

○桃の実 金桃

○蓮の実 漣

○槐の花 六月末より

○蒲

○棗 ○刀豆 ○夕顔の

實 瓢壺盧ひょうぼ ○青瓢葦あおひょうすい。百

印いん。○西瓜せいげ。西域せいぎやくより傳

ふりて國くに。○あぶ瓜あぶか。近世きんせい幾

ふあがら西瓜せいげ。○秫しゆく。粟あわの

苗こめの穂ほをすまふ時とき。○稻葉いねの雲

稻いねの穂ほのか。○稻の花いねのはな。富とみの

以上いじやう稻いねの。○稻いねの穂ほをすまふ

○早稻はやいね。早はや由よしの

○室むろの早稻はやいね。室むろの早はや苗こめをすまふ

○二百古にひゃくこ。立た夏なつの月つきより二百十日にひゃくじゅうにちの

○廿六夜待にじゅうろくにやまち。江戸えどの儀ぎ

○初嵐はつあらし。日ひの夜よのかみこの形かたち向むかふと

虫むし。虫むし間ま。中なかつ夏なつ月つきの夜よをすまふ時とき。野の原はらよ

○虫むし。虫むし間ま。中なかつ夏なつ月つきの夜よをすまふ時とき。野の原はらよ

○虫むし。虫むし間ま。中なかつ夏なつ月つきの夜よをすまふ時とき。野の原はらよ

○虫むし。虫むし間ま。中なかつ夏なつ月つきの夜よをすまふ時とき。野の原はらよ

○虫むし。虫むし間ま。中なかつ夏なつ月つきの夜よをすまふ時とき。野の原はらよ

○虫むし。虫むし間ま。中なかつ夏なつ月つきの夜よをすまふ時とき。野の原はらよ

○虫むし。虫むし間ま。中なかつ夏なつ月つきの夜よをすまふ時とき。野の原はらよ

○虫むし。虫むし間ま。中なかつ夏なつ月つきの夜よをすまふ時とき。野の原はらよ

○虫むし。虫むし間ま。中なかつ夏なつ月つきの夜よをすまふ時とき。野の原はらよ

○虫むし。虫むし間ま。中なかつ夏なつ月つきの夜よをすまふ時とき。野の原はらよ

○虫むし。虫むし間ま。中なかつ夏なつ月つきの夜よをすまふ時とき。野の原はらよ

○虫むし。虫むし間ま。中なかつ夏なつ月つきの夜よをすまふ時とき。野の原はらよ

○虫むし。虫むし間ま。中なかつ夏なつ月つきの夜よをすまふ時とき。野の原はらよ

○虫むし。虫むし間ま。中なかつ夏なつ月つきの夜よをすまふ時とき。野の原はらよ

○虫むし。虫むし間ま。中なかつ夏なつ月つきの夜よをすまふ時とき。野の原はらよ

○虫むし。虫むし間ま。中なかつ夏なつ月つきの夜よをすまふ時とき。野の原はらよ

○螻蛄 このま好んで脛を
りふこ とるなよつむり
の名あり又暇 てりりともよ
○秋の蝶 ○秋の

螢 ○秋蟬 浮土まてはまぐさ
蟬と秋の物と也

蜻蛉 本州云二名、胡齧和名加介呂
虫 布。胡齧。秋津虫。赤平。

○蛸 色やんま何まも大小あり
りて色を異まもるのく ○蛸螿の

○蛸 後取之は去らうく
○蛸 蛸 茅棚のきの

○冷麦 てま好こ多
く山中あり ○冷麦

無三秋物 竜田姫 秋の北山と
ちる林より ○

律の調 ○千秋末。万
秋末。秋風末 ○霧 霧の法

○霧 霧の法
霧の色。霧の形。霧の夕霧。胸の霧。霧の

○霧 霧の法
霧の色。霧の形。霧の夕霧。胸の霧。霧の

露 霧の法
霧の色。霧の形。霧の夕霧。胸の霧。霧の

○身入冷良寒肌 の
身入冷良寒肌

月 月の表。月のま。月の
月。月のま。月のま。

桂 月の表。月のま。月の
桂。月のま。月のま。

新月 二日月と心い
新月。ひ三五夜中の

弦月 凡七八日と上弦と
弦月。凡七八日と上弦と

日月 玉免銀免靈免
日月。玉免銀免靈免

在明 十五日以後の
在明。十五日以後の

既望 哉ハ始りてやそり
既望。哉ハ始りてやそり

居待月 十六日の
居待月。十六日の

暉素 十八日の
暉素。十八日の

金波 月の
金波。月の

更まち月 廿日の
更まち月。廿日の

常娥嫦娥 嫦娥が妾之不死の薬を
偷て月中に去るは是を蟾蜍

之 眞如の月清浄真如の 雲外の月の正心

の月胸の月心 盃の影

盃の光をくよとくころハ 月の劍

秋のくろ一表の月を括る 二日月の形を 月の都月宮殿

刀刃まことし 眞夜中廿二夜の子の二刻よきて

椎柴 椎の葉 椎の實 枉チノミ

枉と正木のまららと杜仲とその子 お似てくを別しからんものなり

芒薄 鬼芒 纒芒 雁の羽

まきさ 篠芒芒ハ志けきま 旗

芒十寸穂の芒穂の長くて一尺 麻

芋穂の芒そ 芋の糸芋麻 の心と

心りし芒の穂をく 糸まとの丸くやちま 葛の葉

忍草忍草 葛忍草 葛忍草 草

花色草秋の子 野の花 芭

蕉 辨慶草 雞頭花

菊 萱 雁来紅 鬼燈 番

椒 若烟草 東埔塞瓜 布

瓜 南瓜 瓜 瓜瓜冬よまま

白毛ありて種よ 狗尾草 薑

を葉のまよ 芋 芋魁 芋の子

おハ誤成ト 蓮芋 粟芋 蓮芋

芋 薯蓣 薯蓣山の芋とぬ 零余

子 薯蓣 長芋 黄獨 俗

秋 六十六

澀りて是は何
首鳥といふ
○團栗 ○柳燠

紅熟其その甘き蜜のこし
○酥

柳干夜柳 毎年京極院寺ま
如坐十粒のほり中

登よ終りか
○百柳 漬柳といはれ
この名あり

フけて晒し
○胡靈柳 豆柳 手柳
乳をとり

之山城守
○木練柳 杉木より
治し出つ

以木練
○御所柳 大和の村より
りとも

○和淡似柳 山形村より
のこ

羅柳 形小じて
○田舎柳 尾

材う形をく大はて味淡
○透徹柳

形長く尖あり味い
○團座柳 形大
甘美加羅材より

てまろ
○樽秘柳 尾碑材之
らりく

い
○蒲萄柳 味美く
食用とど

糕 菱材と米粉を和
○小穴よとふ下血下利を止む

効あり
○猿酒 猿葉をとりて山中
あり

の凹方ふ下竹へ
○梨 熟て酒のこ味甚甘味あり

子天殺 梨子之その大なるもの
り一尺を寸小を寸

紅瓶子梨 瓶子の形
○松尾 赤くその肉也

梨 その毛をのぐ
○水 桑妙舎津の中松尾の産

梨 ち梨は他
○空閑梨 肥ちの
福色なり

大
○の浦梨 草生の浦伴勢
かり方よか枝

さ
○妻梨 形の妻は
よあり

か
○新米 新葉
ありとよ小や

○今 稻干 稻扱 稻新
○田の 稻舟 掛稻

色田の庵 田とま 小田守 山田守

○晩 雨あはゆんそ 稻 がふりれ名 ○鳴 きり

子鳥劫引板鳴竿案山 こどりやうひいばなうり

子彈 こたま 焼帛 やきひき 馬の尾を焼て田

塵火屋 ちりびや あれ

○木綿取 きわた

桃吹 ももふき 白綿を吹く

○鹿 か 鹿

加せ地 かぜぢ 抄

夢野の鹿 ゆめののしか

紅葉 もみぢ

鳥 とり 班竜錦馬 はんりゆうきんま

鹿笛 しかふエ

鹿垣 しかがき

鹿狩 しかがし

鳴の羽搔 なるのうか

○鶉 うす

鶉衣 うすぎ

○鶉 うす

鶉の草 うすのくさ

早贄 はやね

秋 あき

の物とて
魚イサ ○鱸カサガヒ 小ちうと世以古く
魚イサ の六七才と波瀬と

ふ又上須
魚イサ ○沙魚サマシ ○鯿カサガヒ 此と九万
匹とよ越中よ

出るもの上ホ
魚イサ ○小瀑江鮒コハシ 細の小
江附とよ或ハ名吉或ハ江女

又伊奈須走小
魚イサ ○鮒カサガヒ 引。弱雲
秋天弱光とらんとき

裂脰
魚イサ 時一片の白雪ありそ
の雪降くして波のこ

とく早を弱とよ
魚イサ ○鰻ウナギ 鰻ウナギ 魚雄
ありて雌を以て以鱧魚と漫と

時ハその子皆禮魚の響よとて生ず
少んよ襪
魚イサ ○秋の宮
皇后宮の所

襪とよ
魚イサ 西に在るとて中宮と
の宮ハ東にありとて中宮とよ

る又まきのうと号と皇后宮ハその
秋宮とよ中なるなり
魚イサ ○秋七種

秋七くこの名ハ○萩○尾冬○梅子
○葛の冬○女郎花○夏かつよ
魚イサ 秋良者万葉
よ出たり

八月 南呂
種南ハ陽ハ呂ハ旅の
山ハ陰氣ハ陽氣ハ旅

助
魚イサ ○白露
園處暑の後十五日
秋分
白露十五日斗酉

秋分
白露十五日斗酉
仲秋。桂月。竹林。牡月。中商

。中律。難月。桂秋。南呂月。素
秋。燕去月。雁来月。燕六月。葉
月。さよとよさ月。こそめ月。くは

つ月。秋風
月。月。月

八朝 梅
魚イサ ○恃怙の節 憑の節
この苗田の實のよ田の實の節とを

供
魚イサ ンヤハ格の初種とよまハ秋まら
あり

○尾花の粥
八月朔日尾冬
と和して粥よ

考る尾冬代
魚イサ ○繪行器
木地とて
の良業と云

ささとせり目出
魚イサ ○天中の節
この
夜後とせり目出

日ハ凶悪の日あり故よ若ハ陸海亦よ
り天中礼とて符と考ゆの門戸
秋八月 六十七

よ貼せ
○**絲雀** 造維。造松虫。
造松虫のふとも各
思ひくま造りて後ろくひよ
とて児女同志ありあり ○**三村祭**

泉野塚甲斐所の志あり関口明神
といふこれ位吉明神の外宮と稱して
祭八朔 ○**塚天神祭** 三日泉野塚
日三日 ○**我町の志**

あり六月十三日と云林本と今日
と秋祭といふ林奥之ひを高へほ
行あり ○**天壽の節** 四日唐土小
とあり

壽の節 ○**北野祭** 四日祭る林之生
とあり 中八天満天神祭
ハ中ね 西ハ吉祥女 後ハのり一條
帝永延元年八月五日祭れと云て
友舞あり後年 ○**千秋節** 五日
四日了定めらる

唐玄宗帝降誕の日之故也
つゝ後改めて天長節といふ ○**白**

髪開帳 五日近江下白髪大明神
ハ往因彦之若八開帳あり元
緑中より ○**敦賀祭** 十日秋分因
止り 敦賀郡あり

り祭神仲哀天皇 十日。
之氣比社といふ ○**司召** 秋の除目

○京官除目。定考
まらふよむ何あり ○**待宵** 冬と
とソノ四日の ○**名月** 名づる月
祭の月なり ○**けんの月**

を青の月。十五夜。三五
夜。正月。月見。若中月 ○**新月** 白
天が訪ふ三五夜中新
月色といふことあり ○**端正月** 是六
く西宮の月といふ 佐百々日必
ちんがくといふ 芋名月 芋と菓子と
と金ひゆまよ

芋名月の名あり ○**月華良夜干**

六夜の月。哉生魂 既生夜
あり時の 名月蝕 ○**初汝** 秋ハ
十六おこ

心金ハ水ぞゆて登るる ○**八幡祭**
なほ月丈汝ある時祭り

十五 **放生會** 放生川とい
けりといふ ○**鶴ヶ**

岡八幡宮 十五日相州 筑紫宇
孫倉あり

秋 七十

佐宮祭 十五日豊前守の八月十五日
日祭礼のり由社より

始也
○志賀八幡宮 十五日近
江ふり

箱崎祭 十五日祭
あふり ○輿田祭 何
あふり

○八日より神事あり十四日宮の刻成
真美の陸へ後所なる十五日祭礼

安濃津祭 十五日伊勢国之者八
社之寔也九年送還を

小ぶ ○豊浦祭 長門を浦祭
あり富時祭り八九

月十五日之者ハ
八月二十一日 ○三津八幡祭 十五
日祭

州西成郡三津の町あり
三津といふは春は難波は是也 ○富
岡八幡祭 十五日江ノ城南赤川
あり富時祭り八日

別當大栄山永代寺 宗派川
才の大社之或云神休八若云の作 ○野

口念仏 十五日播州加古郡教信寺
あり是ハ孝謙天皇の法

宇教信より傳加古川より傳し念仏
を是より秘人の者なりと云ふは是也

の勞と助て貞親八年八月十五日盜
賊のより首級と斬らるるその者の

泣くを速ッ教信と号す ○駒
を日傳法を承りて伝ふと云ふ

迎 ○駒牽○引分使○望月の駒○
より糸の約○上野約○武蔵約

○志々の約○菰坂約○若八幡玉の牧
より 牧ハ馬と云ふ 兼中ハ馬と云ふ
者ハ此より

之天皇南宮より出所なりて所馬を
此後一公ハ已下次才より行ると云

るるあり次ねを以て陸の所不承
て了すすのりせりこの勅使と引分

の使より元ハ十五日ありはもと
朱荏陸の所国思ありは前十二

日よ ○菅大臣祭 十六日赤四条
あり 南後ノ小跡

西洞陸の系あり是後が所不の
旧跡ありてを於小社と存は祭礼神

與後所の系 ○御霊祭 十八日上
御新五年目くる 由虚

八京極國助遠橋の辺あり下の
此其ハ京極通大帳内門小東あり

兼名祭 十八日春日大明神と祭る
より勢州兼名の城下あり

秋 七十一

り ○菩薩祭 北二日肥前守長崎
に於て末船人船神

と祭る是をふき祭といふは唐の地より
唐人の古四書ありていふに祭ると

り ○龜戸天神祭 北五日以本
ふの末志戸村

にあり祭る不荒祭 ○西院祭 北
太宰府の神体二回

日春日の神社八洛西葛野郡よりあり
四条通西の土手四町斗え西院

村の西平林の ○秋社 立秋の後
中よりあり是に 五の戌の日

と秋社とて大 ○燕歸 燕子春社
抵春社とて同し 燕よりて

秋社と ○秋社 秋の日の下日
去る ○秋社 秋の日の下日

彼岸 霜月の年より十五日め入
るに。後の彼岸とて又秋

季と結んで秋 ○野分 八月の大
のひかんとて 風とよみ

良寒 八月且又やうやくとて
肌寒薄や又おそし ○碓

碓ハさぬり、持衣石をハ木幣と用
ゆんども若ハ之碓なりゆんども

布よ衣打 ○衣四打 ○あやま
とり 衣打。まろち打とて

衣打拍 ○長夜 八月より九月
子なり

初紅葉薄紅葉 ○名木散

俳句季をさすより出で分ちかじ
或説は材擡指の敷いとらぬは出で

なるもの葉名 ○新蓋草 形芒
るりとて 似て秋

積と出まを倍は菊安とて和名。かこ
る。のみ。あ。ま。名。黄。州。茶。木の名

り ○牡丹根分 大い秋をあら
り 根とてくると

敗荷 傳衣蓮の葉の ○木芙蓉
秋風ふらぎとて

水と出るものとも芙蓉とては花は
名見たり陸に出るものと木芙蓉

と ○木犀 江南の桂ハ九月迄と聞
云 雲をハ木犀とて

と桂化 木犀 ○縷紅 縷細密
花に 縷紅 縷細密

のほそめ ○梅嫌 正字不詳
色浅き 梅嫌 正字不詳

金剛草 その根強く平らるるを替

檀特の花 芭蕉の属を葉より

花紫 此傘木の皮よりの葉をよ

粉花 ○夕錦この葉駿物の野徑

鳥頭 葉芥より似て厚葉の毛

苑 一名紫菀。選

○露草上月草 佐小おま

○宇治 八月新とて開花すこの名あり

花園 宇治ハ神天皇の離宮

○滋賀花園 近江

○芒の穂 尾

○龍膽 和名抄よ

○黄蜀 俗ハこまんとてんさく

○漆の花 ○烟草

の花 一名相里

藍の花 ○菘の花 ○水紅花

木賊類 多丹波よむ

の花 芦の種又

○苦参引 和名

○胡黄蓮 り草。牛の舌瘤茎

○藥堀採藥 引せんふり

○萱 山よびて葉

○銀 柘榴

○茴香 杏の子

○通草 和名くまの

○蔓 蔓とよ木通のこ茎よ
細き孔をば故は通草とよ

○茄支 本名。小茄子
一名 天瓜 地瓜
吳名。錦荔枝

○新羅葛のぶつ
○蒲萄 蒲萄
樹のぶつ

○種瓢 ○眉兒豆 倍是
紫葛

○種瓢 ○眉兒豆 倍是
橘豆とよ或ハ隱元豆とよ黄壁隱
元始めて括注り本まきりといひ江戸
よてハ豆とよ西

○虞美人草
褒斜山谷の中よこの草あり花ち雞
冠のこくく大きて是は花はわ對す
と云

○木耳菌 木より生まると
木耳といひ土よ
り

○松茸 椎茸 棕茸
菌とよ

○紅茸 羊肚菜 栗茸 鬼蓋
菌とよ

○鬼筆 藟菌 竹の蓐 石茸
菌とよ

○初茸 湿地茸 革茸 舞茸
菌とよ

○麥茸 榎茸 猪茸 鼠足菌
菌とよ

○馬勃 磨孤茸 本草平茸 庭
厨本草よ

○滑煤董 板よりか
平茸とよ

○蛇 蛇
菌とよ

○天狗茸 月夜茸 程大毒
茸とよ

○近 笑矣子 又笑菌
又笑菌よ
作るひの

○毛 毛
お楓林の下よまき大まあり是と食
笑ふて止むと終よ死よ至る速よ
人糞穢土と嘗て其毒と消
毛時ハ偶活ることありといふ

○中 稻 八九月新とよむる
見 農氏秋よむりて年貢を收納を
るこりり 縣吏田地の善悪と巡見
毛見とよ

○落穂 稻束 稻掛 八
稻とよ

○束穂 束とよ大なる稻穂ハ未だハ
束とよ 稲ともなり束ハ一握り
とよ

○粟 粟引 嬰粟
とよ

○粟 粟引 嬰粟
とよ

○粟 粟引 嬰粟
とよ

○粟 粟引 嬰粟
とよ

時○芥菜時○蘿蔔時○

小菜 ○花菜 ○中菽大根

○鴈 ○雁 ○雁

○鴈金 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

時○芥菜時○蘿蔔時○

小菜 ○花菜 ○中菽大根

○鴈 ○雁 ○雁

○鴈金 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

○鴈 ○鴈

て魚とくくしり **翡翠** 一名山翠
若かりしなるり 魚翠

同物とくまじ **連雀** 雀
ありて同じく魚とくま

大なるがじ **菊載鳥** 冠毛
あり難のてさうのじ

大目白不 **椋鳥**
るさのくくくするものあり

秋鳥より **素鷹**
灰色はんで掠の木まむ

能ともく **鴉子**
一説イカルカとてり

鳥 雀より大之者黒色
食して味よとより

いど **鵲** 雀より似
あり素よりのじ

茶紙よみ **鶉**
ありはらへるの目し似くま

檀鳥 檀んで外の木
むむ好よりか

ひをやく **鶺鴒** 鶺鴒
ひとは極てゆせ

鶺鴒 鶺鴒
ひとは極てゆせ

世俗物の粗 **鶺鴒**
とつとつとつとつ

〇くく **巧婦** 巧婦
状チ雀より似

引 **木免** 木免
く羽毫少とせ挿

〇高羽 **高羽** 高羽
以て小者と

竿の尻は **魚** 魚
木の末は

〇草魚 **草魚** 草魚
〇草魚〇鯉と見え

〇河鹿 **河鹿** 河鹿
〇河鹿

〇太刀魚 **太刀魚** 太刀魚
〇太刀魚

〇下り梁 **下り梁** 下り梁
〇下り梁

〇蛇穴 **蛇穴** 蛇穴
〇蛇穴

〇新酒 **新酒** 新酒
〇新酒

〇新走 **新走** 新走
〇新走

〇新走 **新走** 新走
〇新走

〇新走 **新走** 新走
〇新走

〇新走 **新走** 新走
〇新走

〇新走 **新走** 新走
〇新走

〇新走 **新走** 新走
〇新走

〇新走 **新走** 新走
〇新走

〇新走 **新走** 新走
〇新走

〇新走 **新走** 新走
〇新走

〇新走 **新走** 新走
〇新走

〇新走 **新走** 新走
〇新走

〇新走 **新走** 新走
〇新走

〇新走 **新走** 新走
〇新走

〇新走 **新走** 新走
〇新走

〇新走 **新走** 新走
〇新走

〇新走 **新走** 新走
〇新走

〇新走 **新走** 新走
〇新走

〇新走 **新走** 新走
〇新走

〇新走 **新走** 新走
〇新走

〇新走 **新走** 新走
〇新走

九月

この月花やうやくまじり
松長月といふ又思へて長月
○無射 圍陰氣升陽氣降て
万物陽氣上騰ひさ

出て食ふしほくくハ虫魚の類蟄
伏し草木根さうり潜むるごとく射
るこは仍

○寒露 圍秋分の後
十五日斗辛

○霜降 圍マ方の後十五日斗
辛 戌は建を霜降

○季秋 抄秋 梢の秋 暮秋 晩
秋 玄月 素秋 紅樹月 菊秋

○紅葉月 彩月 菊月 寐覚月
○木深月 色とる月 小田刈月

○鞍馬祭 朔日京都之鞠大明神
○大巳貴等と祀事

○氷室祭 朔日南都四所之氏神
祭ハ春日伶人舞まあ

○御燈 三日春三月におもへ北
斗は灯をもちらるり

○幡祭 五日山城国宇治郡木幡の里
ありあつ神柳大明神と号

○不堪田奏 七日昔ハ
法国の田

○桂宮相 八日六條の小西洞院の西
泉

○撲 八日六條の小西洞院の西
泉

○涌寺舍利會 八日洛の泉涌寺
舍利會は於て毎

○重陽 重九
重陽宴れ

○菊花酒 是
臣は兼酒と扱ふとあり

○菊花の宴 是
臣は兼酒と扱ふとあり

○菜 是
臣は兼酒と扱ふとあり

○高 是
臣は兼酒と扱ふとあり

○黄袋 是
臣は兼酒と扱ふとあり

○高 是
臣は兼酒と扱ふとあり

○高 是
臣は兼酒と扱ふとあり

○高 是
臣は兼酒と扱ふとあり

○高 是
臣は兼酒と扱ふとあり

子小登る 九月九日望々臺 ○九日

小袖 九月朔日より八日又奉りて各拾と表を九日より良歩皆

綿入道 九日と日よ小袖 ○あつめ酒 九月此

表白裏紫 菊の著綿 九月此

の華幣中も及て此日の式を酒

風雲と防くこと ○菊代節供

栗の節句 奉邦の倍々九日親戚

栗を以て一菊花酒を呑むゆえ

○後の雛 雛祭三月三日九月九

り 日昔八日と云ふ時節

○海麻廻 九月九日

田夫野人の祝ぶふして海螺の空

醍醐祭 九日山城国宇治郡小野此

御香の宮祭 九日山城必伏見家

ハ神功皇后 九日山城

○貴船祭 九日山城

○生 九日

○十日菊 九月此

○小重陽 十月唐土よ八京

○四宮祭 十月

芳菊ハ九日の佳節は用ゆる物なる

菊の宴 十月唐土よ八京

小重陽と云ふ朝小

てハ後宴と云ふる

必滋賀郡大津の跡あり坐る神四
坐大比叡大日小比叡小日氣比仲哀天皇

小禪師
本出宇治郡下又考

香羽在坐る神午頭

○五條天
天王田中天王と号せ

神祭十日京都命とそ末師の倍この社

と天使の

○例幣十一日天皇孝徳

社天皇

天皇より例幣使と代り

天子より伊勢大神宮例幣となり

の何年のこと

○御難の餅八年

九月十二日日蓮上人お州竜の口此厄

難白双の下僅一命を全ふせと後

世宗門の徒資と作り係あり

○宝

の市十三日住吉の社地市姫の社

とあり例幣の市の始

と多く外をとるゆえ外の市と

りひ又取餅をとしともて宝の

市とも

○白川祭十三日天満天神

の祭はて洛北白

川の里南山の上あり旅不本社香

居の前二河とり西あり例幣九月

十三日土人

○十三夜後の月二夜

豆名月名残月初一宛平法皇

明月無双のよ一仙出と依て我朝

九月十三夜と以

て明月の夜とも

○天王寺一乘

會十四日揚州大坂四天主一乘會

八九月十四日或十五日六時堂

と是と候とると是傳教大師草創

の地はて奉とるハ某師日光月光

の三号大師と

○岩倉祭十五日

神の社ハ洛北長谷村の西岩

倉ありて初帝都の守護神

○小

倉祭十五日豊本必企救郡々村の

坐中ハ忘神天王左ハ

神功皇后右玉依姫○栗田口祭

十五日京都都又午頭

○岡崎祭十

天王と祭と拜七本あり

日或ハ十六日洛東岡崎あり是東天

王の社とり西天王の社ハ吉田山の

禁あり祭の日群七本出るその内一本の群紐下は尊二連大一足と造り彩色と施す是也
大尊群紐といふ神宮也 ○一宮祭

十五日河内玉交野郡北牧方村あり祭る神午堅天皇八王子小野天神杉社帝釈天王四天王照立寄姫大明神浅原大明神法皇年曆洋

○神田祭 十五日江戸湯島あり祭る神二重大已貴等平稻門の灵あり祭り八幡所山王と隔年して是とに祭る大

○牛御前祭 十五日武蔵系も祭る 隅四境の下より清和天皇貞観二辰年慈覚大師の勧誘之為社本正の搦

○築土祭 十五日江戸鑑さるり 外はあり尚社若八幡内門の内はあり故に二名田安大明神其号あり ○芝神明祭 十一日より廿一日と社江戸日比谷山門外あり別当壹剛陀神主西东氏祭礼日数廿一日が間秋雨多しと

もて世俗めくされ祭と云ふ祭礼の若社内にて是を奉事あり ○大

秦の牛祭 山城公太秦廣隆寺乃祭村の南山ふあり 九月五日上宮上皇の庭に於て祭る也 ○山口祭 園

園吉浦郡仁壁の神社九月中巳午の日祭礼と行ふ祭る神住吉三神を以て奉 社と云ふ ○度會新嘗會 外宮

日内宮十七日神嘗祭之内手より伴幣ありて初稻とまらせりてよりて子稻米の祭 ○桂川御稜 十六日桂川文堀

川の末流にておの尾より南と桂川と云ふ ○穴織祭 十七日十八日松州豊島郡池田村氏あり山上ありは後羽大明神と号す穴織

呉服の両社そのる 日暮 日暮二十町あり ○呉服祭 十八日 御幸島郡池田村の園の中ありは呉服大明神と号す ○城南寺

祭 廿日山城公羽のたあり祭り祭社二重鳥羽天皇に ○八幡

花の頭

北日山城五八幡山の社悟才
子繁と利家を加へて時季

と繁一泊宴催を以ての春ハ
六月日と云らるるつらむらり

渡利女祭

北日洛陽寺止の北室所
の西より倍々繁昌の

社より子孫の業を祈る舞臺ハ
安利女の流り成づく元針女と云
るありて

旅夷祭

北日洛東建
仁寺の門前

ありて西因所勅請を以て
りの海上より赴く人ハ先ツ社に來り
風波の難をうらん

上難波

ありて西因所勅請を以て
りの海上より赴く人ハ先ツ社に來り

坐摩祭

齒才三平世に後三條
佐延久三年勅請

北二日務御西成郡の社社と云り
日の祭とお嘗八十名由來といふ

淀祭

北二日山城五八幡郡の社社
橋の東に河川ありあり

北二日天逆向津姫を以て
つらむら天照大神といふ

鹿ヶ谷

命は地神才二の神はて
父ハ素盞烏尊なり云々

逆髮祭

北四日洛東洛土
村十椽所の祭

北四日江州洛東郡琵琶湖の南
園の清水大明神祭九の社と稱す

北五日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北六日北衣笠山丑寅の林中
に六不明神といふ又北山天神祭といふ

北七日津村
北八日流瀧馬の式あり

北九日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北十日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北十一日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北十二日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北十三日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北十四日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北十五日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北十六日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北十七日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

福王寺

北八日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北九日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北十日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北十一日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北十二日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北十三日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北十四日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北十五日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北十六日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北十七日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北十八日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北十九日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北二十日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北二十一日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北二十二日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北二十三日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北二十四日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北二十五日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北二十六日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北二十七日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北二十八日流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北二十九年流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北三十年流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北三十一年流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北三十二年流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北三十三年流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北三十四年流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北三十五年流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北三十六年流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

北三十七年流瀧馬の式あり
社ハ三番あり

妻恋草。錦葉已
上巻玉又出たり
紅葉かつちる

うつちるハ也づちるごとくなり又且のま
のむよりと又二説又又まそつく散之

ともし
紅葉衣 表黄裏種枋丸
月夜又黄紅葉と

ハ表黄裏衣也又また紅葉ハ表ま
黄裏紅これ外色あり思之 紅

葉の土器 菊の葉は對
ての名あり 紅葉狩

山崎ハ紅葉を名めり
かり撰るがいは同 地榆 割
木香

五亦紅紫藤又似
て名ハ千日紅又似たり 川芎花

本名芎藭又乃名と蛇体草。蛇避
草共採取月令不出和名女うら又牛艸香

突ハ當也 黄芩の花 二名こひ柳。
枯腸の長り

一寸計筒咲紫 岩菊の花 花
又白花もあせ

一処より多くあつちり咲くさう
あ他のもくうれハ名抱菊云 薑

の穂絮 椿の實 本名海石
櫛。幾内又

ハ赤の方言よ播を只
木の實ともなり 橘の子

密柑 柑子 橘の落まり
さしもの 乳

不倍九年 金柑 全橘と
母と書 しいふ

温州橘 其葉密柑に似て落く
味ひつとつてみたり

佛手柑 実の取人の手の形に括あ
りなよ仏手柑とよ味よ

うらけ香氣ハはるる日
ホよほ近世見こまり 枳殻

の垣なきよ多 榲桲 マルメロハ
く括るものあり 蜜名こそ

突初め生さる時毛あり
熟まれば毛は伝およば 南天燭

の子 嬰子桐の實 天竺桂
の實あり

さざれ木とよふもの之幡は制さる
ものありやぶ肉桂とよふものあり

皂角子 紫ハ槐に似たり実ハ豆
のこくさやと毛も長サ

尺余よも及ぶ交 木薬子 紫ハ
美白はふや開く

倍の実と ○菩提子 枝葉は
ツブといふなり

似たり人その実ととりて念珠につく
る倍は鬼見愁と名づく能邪気と
碎る

○川棟の子 棟と云真梅
と云

檀と大は其実 ○桐油の實 実
と金鈴子といふ

大い油よまかり用ゆその功在の
油よ似たり本草 罌子桐虎子桐と
いふ

○棕の實 木八枝の木よ似
たり

成 ○榎の實 高木あり本
は似たり実

ハ搵持と似てふかく云ハ愛
と云倍よんでカラボケと云

○枏の
實 和名をつるがごとし
黒色を染るもの

○老母草
實 四時紫洞とその実あり故よ
百年青の名あり唐土よハ嘉祝

よ必を用 ○栗 落栗。越栗。燒
ゆといふ 栗。榑栗。茅栗。

剥栗。くりこもち 栗栗と粉とな
打栗 栗子餅 餅よまじり

山の 出落栗 地よ落つ故よ名つ
なり

く倍丹波のてつち栗といふ
是こてつち人出落の誤なり

三度
栗 城後及び上下の野物よあらしもの
小て尤小栗二年よ三度実のる

と 山栗 さがり栗栗といふ
云 榑栗 倍

ひちりく栗といふ山栗の田
さしものはて尖らざるもの

してその殻とさる鞍馬の村
婦栗栗と称するもの也

栗よ皺多し故よ ○標の子 栗
ハシバミといふ

悉く櫛と似て分ちる 光よ白の如
き毛のあるものハシバミ櫛よハ毛の

いさ山のは推のていふて
食ふ又凶年ハ粉はて食ふ

○椎
落椎。椎拾ふ 椎ハ実の名一本の
名ハハあらま木の名ハ鉄櫛といふ

推柴 ○椎の柴。椎の小枝。ゆて推
柴といふハ推の木のみ木

又成り ○團栗 櫛の
るなり

○新胡桃

十四

楸果 ○新榧子 大木皮木子牡丹

又松ふくし 松ふくし ○新松子 松ふくし

○水木子 喬木

○菜 山菜黄。食菜黄。呉菜黄。何

○榼藤 通菜のこ

○榎の實 胡椒の天子さよ味直

○熟柿 烏柿

○花果 古名花区

○上戸 本名白英一名鬼目

○仙藜 本名珊瑚葉

○漆の子 漆ぬるで

○破芭蕉 秋風子破

○豆 秋風子破

○引 小豆

○蕎麦新新蕎麦

○草牡丹 紫

○佛甲草 倍

○菊 紫

○菊 紫

○櫛の實 櫛

○櫛の實 櫛

り楸ハ食一楸ハ食まづらむとく
いちぬハ毛あり楸ハ毛をーさ
○
梅嬾うめいん子と結ん
○野山の錦にしき紫

の○山粧やまぢふ○薄うすちる○未
枯○枯草の露○鯉魚風りぎよふう

九月のこきし風かぜ
風かぜといふ
稲孫田いなひら千土生ちつち○孫稻ひら○稻の刈

○暹根晚稻晚田せまねん
○露水○露霜
露時雨○霜踏しもふむ鹿か

法抄ほっしょうよ
○尾越の鴨おしこれハ鴨餌
秋とを
○紅葉鮒あきばな附つの權ごんははいりり

○熊栗架くまぐりと搔か栗の指ゆびは熊
○爵入大水しやくに為な蛤かき
化くわしく潛物せんぶつと

○豺祭獸せうさいじゆ李り由ゆハはりり豺せうのし祭さい
○熊栗架くまぐりと搔か栗の指ゆびは熊
○爵入大水しやくに為な蛤かき

○崩魚くずれいさな
○網代打あみしろとも九月九日くわがつくのお
○番綿ばんめん

○赤あか
○胡黎こり九月野外くわがつの群ぐんともらん
○赤あか

○秋あきの善ぜんハ秋あきの夕ゆふ
○秋あきの目めとも建た

秋あきの限かぎ秋あきの名な残のこ秋あきとも惜おぼむ

冬十月 八十六

秋の湊

何事も苦秋の詞こそ長か
秋涼き。冬を待。冬を
憐。秋と屬
○九月盡

冬

冬は終之物終よかる。冬はひも
之ひもハ。冬。日本歌名よあり
應鐘 雁志鐘とつ六水の成長
動く。つひも。立冬 圖霜後
万物動まか。日斗乾よ。小雪 田立冬の後十五日
良月。陽月。孟冬。上冬。
初冬。暢月。三冬。九冬。時雨月
初霜月。神無月。小十月。か
さり月。神
まのり月

十月

良月。陽月。孟冬。上冬。
初冬。暢月。三冬。九冬。時雨月
初霜月。神無月。小十月。か
さり月。神
まのり月

更衣

朝日。日所衣かへあり掃
寮。其の所。装束と撤して
冬。の。改め。み。只。衣。更。と。な。り
り。よ。て。ハ。事。ハ。四。月。こ。よ。く。心。ぬ。い。○孟
冬の旬

氷魚と賜ふ

更衣の最
二秋の後よ
氷魚と賜ふ 朝日。神の旅。
賜ふ 神の留。この
日。神。出。ま。の。大。社。臨。幸。い。ぬ。○
と。り。右。吉。の。神。送。り。九。月。晦。日。す。

神送り

朝日。神の旅。
賜ふ 神の留。この
日。神。出。ま。の。大。社。臨。幸。い。ぬ。○
と。り。右。吉。の。神。送。り。九。月。晦。日。す。

焦燔と食ふ

朝日。映人。この日。蒸
製。と。作。り。て。芥。物。と
す。荆。楚。の。人。多。く。焦。燔。と。食。ひ。或。ハ。糠
と。を。焦。燔。と。い。ハ。酒。の。滓。の。こ。ぼ。よ
る。や。う。な。○拜墳 朝日。京師の人十
るものあり 月。朝日。墳。よ。後。で
以て。餐。粮。 朝日。煖。炉。舎
と。な。ま。す。○炉開き 朝日。煖。炉。舎
と。な。ま。す。○煖。炉。舎。を。日

炉開き

朝日。煖。炉。舎
と。な。ま。す。○煖。炉。舎。を。日
炉。と。用。さ。し。月。晦。日。炉。を。ふ。さ。し。唐。土。よ
て。日。炉。と。用。さ。し。炉。中。よ。て。肉。と。あ。ふ
り。飯。食。を。是。と。○炉。灰。と。進。る
さんろ舎。と。い。ふ。○玄
唐。ハ。ハ。朝。日。有。目。炉。ハ。煖。出。灰。と。い。ふ。○玄
な。ま。す。と。こ。の。文。教。聚。ま。ぬ。さ。り

玄

朝日。煖。炉。舎
と。な。ま。す。○煖。炉。舎。を。日
炉。と。用。さ。し。月。晦。日。炉。を。ふ。さ。し。唐。土。よ
て。日。炉。と。用。さ。し。炉。中。よ。て。肉。と。あ。ふ
り。飯。食。を。是。と。○炉。灰。と。進。る
さんろ舎。と。い。ふ。○玄
唐。ハ。ハ。朝。日。有。目。炉。ハ。煖。出。灰。と。い。ふ。○玄
な。ま。す。と。こ。の。文。教。聚。ま。ぬ。さ。り

猪

朝日。玄。猪。餅。の。所。嚴。重。の。夷。の
子。能。皆。餅。む。り。ハ。山。猪。と。い。ふ。
こ。の。日。本
紀。に。あ。り。○おのこれ餅 初冬。その
月。ま。ま。建

おのこれ餅

初冬。その
月。ま。ま。建

冬

初冬。その
月。ま。ま。建

さきと夷の日亥の刺餅と食ハハ病々
一尾ハ開化十年十月但馬國より初
て餅と決むるまでこの餅の始りと
なり ○達磨忌

五日達磨ハ南天竺の人の初め深
入る武帝契を江と決て魏に入り
り嵩山に居る九年を経て西域に
飯る深の大石二年十月五日入寂代
宗諡して曰

○射場始 天子射場
覚大時と云 小出所
ありて云々以下の射藝と云後あるな
り先代旧本本記或ハ公事根條云二日と云

残菊の宴 五日延喜の代代より初
群臣持とつくり酒
と初ふこと
○興福寺法花會
寺師と云

一名山階と云九月晦日より十月
六日まで妙法の大會と云ひらじむ
ハ大會ハ閑院冬嗣公初めあり六日ハ
冬嗣公の父長恩大臣の行忌日と云
るゆゑその

○十夜 この月廿日よ
り十五日までの
るゆゑその
○絳摩會
十
日
ありて云々以下の射藝と云後あるな
り先代旧本本記或ハ公事根條云二日と云

○金毘羅祭 十日讃州播磨郡
ありて云々以下の射藝と云後あるな
り先代旧本本記或ハ公事根條云二日と云

○芭蕉忌 十二日芭蕉庵杭まゝ伊
賀のくまぐ倍姓松尾氏
初の名ハま七後ハ忠左工門宗茂と
改む後江戸に居りて此譜は名あり
元禄七年十月十二日痢疾を患て
難波の祿亭に没す其角去來大州
笠空殿と云りて大津

○御景供
の養仲も葬るとあり
十三日又所命様或ハ金武
と稱す日蓮上人の忌日
十五日正月元上元七月中元十
月下元と云々と天宗又月と云

○水官
十五日水官人の善悪を
厄と解と云りて天帝は奏臣
と云り

○聖一忌 十七日洛の赤福寺の
開山忌ありて日方丈
は什物と云り午後聖一の像を腰
裏に巻きて怪きの須弥壇に安坐す

冬 八十八

辨當納

前王同一宗師の人唯を西
日の舎日と年中遊山の終

りくまら
名づく ○御取越 一向宗門此
後この月祝

嘗上人忌と終き忌日ハ
十一月よりあようくいつ
○夷講の

月廿日或ハ家例ニ依テ日定ラシ高
野の徒西宮大社宮と云ふこの社高

野と云ふ
誓言文拂 六日長八夷講
ふあるり 高家山海

の殊味と云ふ酒宴を設く年中出
ある所の花主或ハ遊この人を招きて

餐を食し是を誓文拂といふ是ハ老
人爲く欺と賣の罪と辨ふゆゑを

る故宗師ハ官者多くと号して宗極
四條通りと云ふ乃と云ふ社あり

是と誓文又ハ社の社と云ふ又
大坂にてハを宗の社の社と云ふ ○法勝

寺大兼會 北四日より廿八日と云
仁のころもハ後より

本寺宗師ハハ東
坂下西教とあり ○大社の神事

十一日より十七日と云ハ社神葉火神
宮ハ出雲國神門郡神葉村とあり

りある社大己貴尊孝安天皇三十
二年無跡毎年神祭七十二度秘中

十月ハ社ニ詠秘の念りといふ凡十月
十一日より十七日と云を齋と稱する同

風烈しく波甚三日一蛇化皮て葉
葉て海上に浮む是と云りて曲物ハ

登り林多し納むといりその蛇蟻
蛇に似て錢形の班文あり尾先魚

尾に似て岐まゝ屈曲して守り社
のこじ見林系身一と云ふもの ○

梅尾虫供養 梅尾寺ハ明恵上
人の開基と云りて性

長ハ北
○口切 三月ニ茶を搦五六
八日と云 月以壺一語てある

小山一上、九月以法水へ出ると十月
ハハ茶入と壺の口をひらくゆゑハ口

初霜 早霜。靄。初霜
消る。靄の袴。靄

の茶。靄の 霜山崩 葉 霜折
ハハ。靄の紐

企 霜はひこめ 霜をとりて秘系抄
上 上 霜をとりてひこめおと

冬 八十九

雨 又雲雨と出づ。初時雨志 村志

くま 雨志 暴雲雨志 涙の志

くま 雨志 川音

時雨 松風の時雨 川音 松風の
声と時雨の

夜時雨 片時雨 一方ハそれ一方
ハふらふら

横時雨 風志 志志

時雨 風志 木枯 風志 木枯の風志

液雨 唐風 中倍

初雪 初雪 初

初雪の見恭 群臣茶肉志

初氷 初氷解

冬牡丹 八月志

名草枯 十月志

冬椿 早咲椿 椿

大葉の花

寒菊 小葉志

八手の花 葉

茶の花

山茶花 葉

寒梅 葉

歸り

水

花

花

仙花 千葉あり単葉あり ○ 枇
重の物送るく冬の花

杷の花 白き花小て八月より咲は
十月に盛るく臘月と

七ある ○ 榧の花 木を畑こて牧
をきり やりとまらゆを

よわくし油とる物はいぬやま
て食ふづくらし小木よてく実を

むま ○ 散紅葉 ○ 名の草枯
ぶ

る 名の字色の ○ 魁 風木上を
字結て秋

くふ或ハ木枯よ作る冬時の疾風
るり又倍風よ作る本朝の倍字

音詳 ○ 鶯の子鳴 冬日鶯
みらま 中よ鳴く

のあり志ういれも正まるよ
あらしを是とさく鳴く

法木の葉の ○ 枯尾花 ○ 枯
風よ花とふ

あし 枯小ハき ○ 柊の花 和名
ましくとふ きハら

七も秘花よ出ツつらくハ
奇ニ葉よ刺あるなり

士の雪 冬ハ白くふりて冬とし
ウリ 雑もなる

霜氷氷の轄 凍用る 氷柱
つら

蛭氷 是ハも根とも同トものさか
らふよハ無氷とのこりあり

簷下雷の 氷の声 大雪の時
水よなる

るをい 氷面鏡 水の鏡又似
ふらり

雲 雲ハ雨や ○ 散電 電
わたり

ハ 散電ハ似て大なるもの但散電
くして雨電ハさうら散ハ晴の

くして電ハ 散酒 南朝の産く又
晴やほと 雲酒もりふ

浴中散ハ似 散地の錦 名置の
ふらり 文ある

錦とハ 散金散餅 散餅は
ふらり 散餅は

とくハ季ともし ○ 凍不電手
さうらばを散

の薬 雲中ものこえ 凝固め
さうらばを散

雨ときし風の交あまときしかぜのまじり 雪吹倒坐ゆきふきたおす 是七こゝろ

りるなりとくゆきふき 雪作ゆきつく きの作きのつく

時雷ときらい 雪竿ゆきざん 小城こじょう

竹竿たけざん 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき 雪ゆき

加^カ二^ニ香^{カウ} 鷹^{トウ}の 鷹^{トウ}匠^{シヤウ} ○追^{ツイ}

鳥^{トウ}狩^{カウ} 列^{レツ}卒^{ソツ}を以^{ヨリ}稚^シ子^シの外^{ガイ}を
一^{イツ}の香^{カウ}と追^{ツイ}出^デし

鳥^{トウ}叫^{ケウ} 氣^キ鷹^{トウ}とほぶ又^{マタ}狩^{カウ}人の声^{コエ}
とあげて香^{カウ}と退^{ツイ}立^{テイ}る

翦^{セン}鷹^{トウ} ○偷^{トウ}立^{テイ}鳥^{トウ} 小^コかく

○ゆきこつ香^{カウ} 香^{カウ}の香^{カウ}よぶ
そきて竊^{シヤク}まらうと云^{イハ}

○茂^{モウ}一^{イツ}草^{ソウ} 香^{カウ}の香^{カウ}を
かぐと花^{ハナ}お香^{カウ}なり

○洛^{ラク}草^{ソウ} 香^{カウ}の香^{カウ}を
香^{カウ}あるふと香^{カウ} 退^{ツイ}立^{テイ}る

○力^{リキ}草^{ソウ} 香^{カウ}の香^{カウ}を
ふて香^{カウ}と香^{カウ}を立^{テイ}る

○ゆきめ香^{カウ} 骨^{ホネ}クは小^コ香^{カウ}と
かり しくは香^{カウ}と香^{カウ}と

○列^{レツ}卒^{ソツ}繩^{ジヤウ} 麻^マ粘^ネは
ハ放^{ハナ}ちやると香^{カウ} 繩^{ジヤウ}を引^ヒ

○鷹^{トウ}犬^{ケン} ○真^{マコト}狩^{カウ}杖^{シヤウ} 杖^{シヤウ}を引^ヒ

柴^{シヤク}醫^イ 村^{ムラ}人の香^{カウ}カウジ
柴^{シヤク}と香^{カウ}を香^{カウ}なり

○鳧^フ 香^{カウ}の香^{カウ}は香^{カウ}香^{カウ}
香^{カウ}と香^{カウ}を香^{カウ}なり

○鳧^フ 香^{カウ}の香^{カウ}は香^{カウ}香^{カウ}
香^{カウ}と香^{カウ}を香^{カウ}なり

○鳧^フ 香^{カウ}の香^{カウ}は香^{カウ}香^{カウ}
香^{カウ}と香^{カウ}を香^{カウ}なり

○あぢむら 香^{カウ}の香^{カウ}は香^{カウ}香^{カウ}
香^{カウ}と香^{カウ}を香^{カウ}なり

○水^{スイ}鳥^{トウ} 浮^{ウキ}寐^{メイ} 香^{カウ}の香^{カウ}は香^{カウ}香^{カウ}
香^{カウ}と香^{カウ}を香^{カウ}なり

○水^{スイ} 香^{カウ}の香^{カウ}は香^{カウ}香^{カウ}
香^{カウ}と香^{カウ}を香^{カウ}なり

魚^{イサ}氷^{ヒョウ}魚^{イサ}の使^シ 山^{ヤマ}城^{シヤウ}近^{キン}江^{カウ}水^{スイ}魚^{イサ}
網^{アミ}代^{ダイ}一^{イツ}香^{カウ}香^{カウ}外^{ガイ}

○柴^{シヤク}漬^シ 香^{カウ}の香^{カウ}は香^{カウ}香^{カウ}
香^{カウ}と香^{カウ}を香^{カウ}なり

○浚^{セン}取^ク 香^{カウ}の香^{カウ}は香^{カウ}香^{カウ}
香^{カウ}と香^{カウ}を香^{カウ}なり

○網^{アミ}代^{ダイ} 香^{カウ}の香^{カウ}は香^{カウ}香^{カウ}
香^{カウ}と香^{カウ}を香^{カウ}なり

○夜^ヨ真^{マコト} 香^{カウ}の香^{カウ}は香^{カウ}香^{カウ}
香^{カウ}と香^{カウ}を香^{カウ}なり

宇^ウ治^ジ内^{ナイ}上^{シヤウ}る香^{カウ}は香^{カウ}香^{カウ}
香^{カウ}と香^{カウ}を香^{カウ}なり

祭 冬至。唐山の人炎帝と号する者とありて茶と初めたり

医乃の祖神に医術ありてまき月内の神とし祀り ○曆

の奏 朔日中務省より明年の唐の出入ありて是を清境ある唐のくどよりハ欽明天皇十四年百濟の博士が

○宮線と漆 晋魏の間なるころや

宮中紅線を以日糸と量る ○履 冬玉の後長きと一糸を添ふ

襪と献 婦人冬至の日履と襪と男姑よくとすつる

○赤豆粥 冬至。共工氏の子

冬玉は死をその子の灵疫鬼とるなり赤豆をおそろかき冬玉の日州

豆粥を食て 〇あくらかき 疫を攘ふ

十二月朔日赤小豆飯を 〇相嘗 用ふ是とあくらかきとす

祭 上卯延喜式よりお嘗祭の祭 林七十一世ありとす

終る 〇宗像祭 上卯筑前必宗

はく 依りありてる林之坐。田心姫。湯織津姫。市杵

姫の二女之是は皆素盞烏の妻之杜本祭 上卯

〇當麻祭 上卯 卒川祭 この社ハ素盞の子あり

又あり爾化天皇この社にて四月九日山崩一かハ陵之を

神開化天皇。子也神。住吉の神と云重之祭ハ上卯

〇梅宮祭 日法堂ハ大和の邊

上卯 〇當宗祭 上卯 〇中山祭 上卯

松尾祭 上卯 〇大原野祭 上卯

園韓の兩祭 上卯 〇吉田祭 上卯

日吉祭 上卯 〇山科祭 上卯

春日祭 上卯 〇平野祭 上卯

五節帳臺の試 上卯 御

前の試

全上。中の丑八五節の試といふは主上常寧殿

よけて侍従ありふその数姫五人こゝろ主上御衣本より指費

よて御沓と召る主上の御指費と召るこゝろの時より外は但侍

鞠の時ハ帳巻の試は進て召る

○殿上の淵酔 中の室この日又前々々公卿朗詠

々やうもどうさひひその後乱巻あり次才又背をこめてわの陣を

めぐり五節不より又不より有りて控来ちどあり云このより正月

二日三日又もあり潤碎ハふく酒又味あ

○狩の儀仗 又味あ ける継子を交せ 粘はまきさく仗之

○童女出説 中ノ御清涼面よ奉女と出て天子の御説むるは五節の義は

つさる

○鎮靈祭 中ノ寅吉田 公より根元よこの祭ハ人の魂統の

難越するを招きて身申は法むるの命より起まりとぞ

○新嘗祭 中ノ卯その年の新穀の初穂と神又身らとわ之天子由代の初より

とぞ大嘗と云といふ年 毎は行るとは新嘗と云

○豊明の節會 中ノ辰前日神は儀はる彩

教とを日天子まじめ長下小も初ふゆる

○日吉臨時祭 中ノ申建曆三年十月十八日より

祭 中ノ申建曆三年十月十八日より 中ノ申建曆三年十月十八日より

賀茂臨時祭 下ノ酉宇多天皇 賀茂臨時祭 寛平元年十月

よりは云 仁平二年十月十七日丁未 東三條の車神楽行ひ

○東三條の御神樂 仁平二年十月十七日丁未 東三條の車神楽行ひ

○里神 内侍の外ハ皆 樂 内侍の外ハ皆

忌といふ心
○三嶋大明神祭 伊豆

祭ハ中ノ酉日ニ祭林大山祇の命祭
礼の日決玉より商人来りて流の物
を奉ふ是をニ名有る
○子祭 申
の市くひて奉る

○子焼心 亦月子の月ちちゆふの
日又大豆と名ニ服大根黒米豆
をいふ
○道陸神祭 十六日。大
佐天王寺村

合法辻の辺より小サスる仏あり此
仏の教は米の粉をゆり供物を代
へ給ふ蜜柑と雜して踊る是を道
陸神祭といふこの祭の二三日あよ

里村中の寺を出て往來の人ハ供物
料をとふあふふれば繩は泥をぬ
りて人をまきとむ修り
○日陰の
どろくじ里祭といふ

髪 日かげの糸。日陰のかつらハ一
名とさかり若といふ林祭の時
この若をとりて舞人林子まきの髪
は又袖もかざりけるを今も日かげ
の糸として糸よか

○心葉 梅花三
す汁又
金の枝は葉の是貝と作
るまは是と心葉といふ
○神遊

ひのす 式抄又大嘗会の時近江
の板田郡より若船の糸
りて船を春その時あさゆき年
の始はかくこをふとせとよめてた
のこさをつとていふあさゆきこの
あ古を糸よ出より又糸のあ古も
とよふらりさあよあ雪のま

○阿 あ
さくとこをくおわゆるな
ちめ 是も林木の明物の名
知女 まよへ 説多一畧之
○庭

祭 林木の時焼火さう。火慶焼と
ハ不の庭燎と春ること林代
出より
○採物のす 是ハ林木を
出より 鳥人その子

○大前張小前張 おんささとり
まよや
是亦僅るまよや
○神樂歌 千

葛 宮内省又速
滋登 まよ 韓神謡 まよ
坐と下
まよや

九十八

歳○早参○吉○利○早○得鈔子○
木抄作○畫目○引立○朝念○其物
○竈厨の肴○酒厨
古八神楽の付のうし物 ○山神祭

○御火焼 庭燎の遺風凡
此 ○御火焼 この月法社に於て

是と ○吹革祭 八日参る所習具
古の法書に於

○新玉津島の火 不
十三日俊成々の勅法に五糸
南鳥丸の西より昨今迄永

○曆賣 此土月十八日又ハ吉日と
世俗は男女とも之歳よ女

○空也忌 十三
○曉の針 十三

空也上人ハ天禄二年九月十
一日寂庵年七十○空也堂ハ

○袴着 十五
○帶解 日

被初

赤野より西東北の常解
よおに女兒ははめて被と名

酉の市

酉ノ日伊豆國
三信の孫あり

鶏の町詣

酉ノ日鷄大明神の社
武州葛飾郡花又

村あり年々毎年十一月酉の日
市より酉の日ニあり八三日と七
以上の石とあらし

報恩講
二
人孫系して振より

大師講
師の忌日之比
智恵粥

○大師講
師の忌日之比
智恵粥

○後日の能
能の伶人これに
掛鳥

○宇賀
春日祭
日の使

祭
晦日九条東洞院よ
歌舞

妓足揃顔見連見
伎の

名ハ文獻通考よりその伝考
春日祭

春日祭
掛鳥

後日の能
能の伶人これに

○宇賀
春日祭

祭
晦日九条東洞院よ

歌舞
名ハ文獻通考よりその伝考

以て世をなむといふ新尼をよ
つらみせといふ江戸三世の芝居
十月晦日の新茶店の新又移り
の燈籠と出まはせを新見せの餅
物といふ或ハ貝原の花より酒
樽菓子の新と山のこく積あげ
大なるれは進上某大の文章をま
く是を積物といふこれらをもん物せ
んとて法人新集まはる
○寒念
こく更といふべのりせ

佛 凡そ三十日の間仏門の徒毎粒
經を唱はし仏名を唱へて三昧野
を廻る江戸ハ沙彌親善又品川千住
の法場を巡行まはせとさ念仏
と

寒垢離 修験の徒中冬汚
をあらふ新を乞ふは是とさ
垢離といふ是を中此水清
読心書の中製法を
○寒声
その皆空を造り稱せ

歌曲は新ぶもの空申朝音大よ
声を新はまはせとさ声といふ或ハ
ささる
○沢庵漬製
凡そ月
中旬ハ

大根の沢庵漬と製まはせは早春の
新物とさんが為之元不川東海もの
沢庵和尚始て是を製ま
かゝ沢庵漬の名ありといふ
○菜食
さ中虚症の人難肉麻
肉ハとほ梅して食ふ

新干大根 ○太山櫛 ○新
生姜 ○寒苦鳥 一名
堀る

新干大根 ○太山櫛 ○新
生姜 ○寒苦鳥 一名
堀る

新干大根 ○太山櫛 ○新
生姜 ○寒苦鳥 一名
堀る

新干大根 ○太山櫛 ○新
生姜 ○寒苦鳥 一名
堀る

新干大根 ○太山櫛 ○新
生姜 ○寒苦鳥 一名
堀る

新干大根 ○太山櫛 ○新
生姜 ○寒苦鳥 一名
堀る

新干大根 ○太山櫛 ○新
生姜 ○寒苦鳥 一名
堀る

新干大根 ○太山櫛 ○新
生姜 ○寒苦鳥 一名
堀る

十二月 十二月八日
小寒の辰
○大呂 呂を
陽気おんと欲して陰

○小寒 團冬
全の
冬十二月 百一

後十五日斗ツクシ祭マツリ ○大寒ダイカン 甲カ 小コ 之ノ 後ノ 十ジウ

五日斗ツクシ祭マツリ 大寒ダイカン 凡ソドコ 小寒コカン

分カ 立春リシュン 之日ノヒ 斗ツクシ 祭マツリ 之ノ 中ナカ 斗ツクシ 祭マツリ

臘月ラツグヱツ。季冬キトウ。除月ヂウグヱツ。凋年テイネン。急景キウケイ。殷正インテイ。窮月キウグヱツ。嘉平月カヘイグヱツ

涂月ツヅグヱツ。窮節キウセツ。暮冬モクテイ。杪冬シウテイ。二陽月ニヤウグヱツ。極月キョクグヱツ。春待月チュウマツグヱツ。弟月テイグヱツ

。梅初月ウヰノハツ。三冬月サントウグヱツ。乙月イツグヱツ。や。よつむ月ヨツムグヱツ。くま月クマグヱツ。おやこ月オヤコグヱツ。終月シュウグヱツ。かぎりの月カギリノグヱツ

志シ 是シ 月グヱツ といふトイフ 志シ 是シ 月グヱツ

るのル 志シ 是シ 月グヱツ といふトイフ 志シ 是シ 月グヱツ

へハつヘハツ 志シ 是シ 月グヱツ といふトイフ 志シ 是シ 月グヱツ

走シ 是シ 月グヱツ といふトイフ 志シ 是シ 月グヱツ

乙兒イツイ 物モノ のノ 始ハジメ をヲ 甲カウ といふトイフ 末マタヘ をヲ 乙イツ

の朔日ノソツジツ といふトイフ をヲ 終シュウ りリ のノ 月グヱツ 此コ

朔日ソツジツ といふトイフ をヲ 終シュウ りリ のノ 月グヱツ 此コ

乙兒イツイ の餅コシ 或ハアルハ 乙兒イツイ の餅コシ

乙兒イツイ の餅コシ 或ハアルハ 乙兒イツイ の餅コシ

飯イヒ 朔日ソツジツ 六月ロクゲツ 大神祭オホカミマツリ 上外ウヘ 四月シゲツ 小コ おオ ちチ 小コ おオ ちチ 小コ おオ ちチ

月一三輪大ツキヒトサンリンダイ 明神ミコトノカミ の祭マツリ ○天智天皇御テンチテウノミコノミコ

國忌クニヨス 三日近江崇福寺ミツツキミナソトクフジノテラ 小コ て 終シュウ へヘ 三サン 日ニチ 近江崇福寺ミナソトクフジノテラ 小コ て 終シュウ へヘ 三サン 日ニチ

崇福ソトクフ 寺ジ 八ハチ 昔ヨシ 志シ 賀カ 寺ジ 臘ラツ といふトイフ もモ ちチ といふトイフ もモ ちチ といふトイフ もモ ちチ といふトイフ もモ ちチ といふトイフ もモ ちチ

日ニチ 道宗ミチノネ 五臘イツゴラツ あり 正月朔日シユゲツソツジツ と 天臘テンラツ 五臘イツゴラツ あり 正月朔日シユゲツソツジツ と

七月七日シツゲツニチ と 道徳臘ミチトクノラツ 十月朔日ジツゲツソツジツ と 民歲臘タタヒトシノラツ 十二月朔日ジニゲツソツジツ と 王侯オウク と

臘ラツ ○温糟ユヅ の粥カフ 臘ラツ 八ハチ 粥カフ 臘ラツ 八ハチ 粥カフ

釈尊成道シヤクソウノトウダウ の日ノヒ 本朝ホントウ の五山イツサン 於オ てこの山ヤマ あり又唐山イツタン 於オ て十二月ジニゲツ 日ニチ

部ベ の法ホウ もモ 於オ て 浴ユク 仁ニ 志シ 賀カ 寺ジ 八ハチ 粥カフ 五味ゴミ の粥カフ と 終シュウ るル 臘ラツ 八ハチ 粥カフ 御躰ミタマ 内ウチ 下ゲ 奏ソウ 十月ジツ 六ロク 月ゲツ 御躰ミタマ 内ウチ 下ゲ 奏ソウ 十月ジツ 六ロク 月ゲツ

御躰ミタマ 内ウチ 下ゲ 奏ソウ 十月ジツ 六ロク 月ゲツ 御躰ミタマ 内ウチ 下ゲ 奏ソウ 十月ジツ 六ロク 月ゲツ

百二

よもあり神祇友中臣卜部
ホ卒時年六月とのことと巻
○月

次の祭日 ○神今食
十日何
月はおは十日の花初幸ある時ハ

中和院にて終る約幸なき時を
神祇友よ ○事始
八日六質汁
て終る

○御佛名
十九日より廿
日迄仁寿の

寺本堂とてして寺北の中より
南の額の間又南北に机とて依像

塔形とておく仏およ香花と傳
ふ廂と地獄妻の所屏風と

つげ綿
寺仏名の時寺師長
○柏

梨の勸盃
覺ハむ一府の中將和
氣の某抄津必柏梨

の莊を以左近府と寄るその地利
と以官人以下酒醪の料と宛

もれ仏名の
○年の終魂祭
七月

二回今ハこの日は十二月の晦日午
の時よ奉りて正月朔日卯の時よ

星佛賣
この月十三日仏工末年此
属星の形と彫て茶裡

と致む民間ふもこのやををね
京師の街上星仏と賣るものあり

荷前の使
十三日読ふより秋の
湘の格と十陵八墓

御髪上
下午髪人
所髪の内

梳屑ゆりて主を察
○土牛童子
よ向ふく焼たり

の像と立
大さの日影また陰陽
師土牛童子の像と門

口は立ッ青黄赤白黒の土牛と春夏
秋冬の色よとてひて立る之是疫病

○著駄の政
五月二回
檢非違使

在京にて刑法を行ふ頭よあると
とよひ思ふあると駄といふも刑具

内侍所の御神樂
天子内侍不
よ行幸所拜

あり刀自祝詞をいふことあり内侍
不の前よ主を察慢と引て官人庭燎

○寂勝寺灌頂
くんてん

とて本末の坐
と二行よ設くは

十五日松尾の傍あり
六務吉のこ今絶あり ○正月事

始十三日 ○衣配 女樂と試らんと
て先ッ衣と配らる

○浅草寺年の市 凡年の
市ハに於

浅草を以天下才下とて十七日の物
十八日の物より決りの程行登程と

○大徳寺開山忌 廿二日山
城古葛

野郡家野あり大燈国師妙超の
忌日建武二年十二月廿二日寂を

虚耗と照 廿四日床のそとより灯
と照せば貧とて富

貴 ○灶の神と送 廿四日今清
の母ハ今日

灶神天よりウカ日とて家々灶神の
札は供物とば札持 神と送ると

云てその札と焼はるとと又正月
元節は神と送ふとて新は灶神の札

と張て物と ○鉢叩結願 廿八日
備祭ると

の本堂小て踊念仏あり
結願ハととりと

○和布刈

の神事 晦日長門ふ文字の関ふ
あり集人の社と称を祭

る林五坐玉依姫彦火火出見豊玉
姫不昔合所度日破良と晦日の夜

四更祝衣冠帯紐あして鎌と携
へ炬と奉神前の石燈と下りゆ

入り和布と荷てぬる終程祝河あり
元旦は和布と神前は奠ト既日と

こまと撒一圓 ○齋宮繪馬 晦
日は

伊勢国多氣郡齋宮村あり齋宮
の樹下乃の傍は小祠あり毎日此

物終るをかくるそあり物
疫神とすむるそあり

○五條

天神祭 節分。勝の儀。白赤
賣祭る林大已貴少

彦名に祭礼ハ九月十日は行ふ節分
の夜京師の士民糸治一白赤と

買てとを自家は焼くハ赤赤の
條と食ふこの條と食ふこの條社

地はは供まふ所の社の傍る勝軍
とハ或ハもちひとちんこハハハ
名とま

○吉田大教 せつかと
おま

初家吉田の齋場の内陣よけて清
後と修を神人一人こまよ後ふ正月
十九日の
○厄塚建る 節令の終
吉田神祇

官よけて行々その式を上よ塚を
築くこまよ厄塚とよ正月十九日
よ解 解ハ以疫を張あり
去之 ○追儺 古人最こまよを重ん

ど一名おまよらひいりハ餅ハ臘日の
由公事根元よんをえり法ませ
今ハ節令のおとまよ 拙まよまよ
ろじふも金吾除夜進儺とあんハ
各分ハ後

○鬼ハ外福ハ内
俗咒治て来ること久く卧雲日件録
云文安四年十二月廿二日明日立春故
及昏景毎室戴燧豆因唱鬼ハ
外福内四字云この以よりの裁う

○柀賣 柀
挿 ○なる此以挿 柀
の以挿まよの以まよと土佐日記
小も入るえり今ハ柀の以を用ふ

○燧豆 燧豆
○浅草 浅草
鱈 鱈

観音追儺 除夜より七日江戸金
竜山浅草寺よあり

今夜糸指巻中よ元乃チ初更の以鬼
形の者二人堂外よ出ツ又一人方相氏
の假面と被りまよもの是と追て堂
と巡る後除疫の札三十枚と撒して
諸人よ興ふ来詣の人各あらそひ拾
ふて持くりて自家の門戸よ貼まよ

船神祭 小方除夜肉と以船神を
犯る 犯る 孟公孟婆

○節分 ○年内立春 ○除
夜 十二月晦日これと除夜といふ
言ころハ此夜舊年と除くまよ

米洗 米洗
一まん分を米をいぬ日 おん
大歳 元日
と小

○晚歳 晩歳
饒歳 饒歳
○別歳。行歳。除歳。歳暮。いわる
年。年の終。年波流る。年の果

○守歳。春急ぐ。年尾。 春と隣
との際。年の湊。春近き

隣ハ近キ **分歳** 支那の俗除夜
ハ初アツテ 飲祝頌して
大晦 散るは分歳といふなり

日小はともり 十二月小の月を
いふ元九日あり

私大 奥州南部の人十二月小の月を
生ハ翌朔日とて晦日とを

厄祓 厄落時月を
大としをぞ

年忘 唐山人
夜朗と名づく

胸搞 節季
中の方を忘る

節季 二十一日より
二十七日あり

等 廿日より
年籠 伊勢大津宮へ
茶籠一丸目杯
孟宗竹 さかたふのたけ
八目鱺取 江海南とみとをあり伝
州浜傍の海ふらふのを
名産とせし上流傍下流傍一里を
のり冬月ふらふ湖沼沙洲く層
二三尺ふらふら付ふ
築和田の鯉 常陸國美和町の鯉唐國の名
産有りありあり

口塩鱧 あつた冬を
年
の市 松竹賣。経連餅賣。破
子夜
煤掃 和漢戸を十二月下旬
賣
をを掃除するに我儀を

扎納め 初織の札を懸
餅 そく目納め

橋の東二町をめぐり四日市ふあり三河
 万歳江戸をめぐりて照子のきしを
 中ふ
 ○年の夜の大神樂
 大の夜より正月五日まで江戸の町に
 大神樂の獅子舞やあそびなど
 を舞ふ

○神祇之詞

大嘗會新嘗會○宮居

○古宮。小宮。
 竹の宮。雲竹。 ○社。荒社。うや
 の社。古社
 ○あそび。あそびの社。社
 取。東社。あそびの
 鳥居。朱の
 鳥居。ふの
 玉垣。瑞籬
 とりあ。丸木のそと
 朱のあがき。千代のたね。あまの
 玉垣。あそびのあがき。あまの玉垣
 片をた。子木の
 片をた。駒犬 ○
 拜殿。神供殿 ○祢宜。神主
 舞殿。宮

○社人。まへ人。かんま。社家。
 市面。そつり。社務。神子。社僧

長官。祭主。おまら
 子。寺師の太夫
 所えら

ひ 伊勢山田宮治の高木
 御祓
 句よりて皆神祇
 御注連

○夜かぐ
 神樂。里神
 川。みーめ引 ○神樂。夜かぐ

祭。祭礼 ○神取。神の
 忌竹さげ ○御幣。大ぬき。

神慮。詔宣。夢想。御湯

立 ○拍掌。座拍。忍拍 ○

御闌 ○御贖物 ○木綿

○便の水 ○御火

冬 百八

燒いしもの○齋まじ持を物忌ちぎ誓言文ちかひごころ

胙ひしんぎ起請を○氏神うぢがみ打火ひ切き

火ひ鎮守ちんしゆ○三寸さんすん洗米せんまい○

繪馬えうま○矢鏑馬やぶさきうま○放生會ほうじやうかい

岩船いわふね穗屋作ほゑ神かみおろし

舟玉ふねたま金かねはらら○常陸帶つとむづ○

東遊あづまあそび乙女子おつめ○伊勢講いせこう○

初午はつご○小忌衣おこころも○庚申待こうしんまち

月待つきまち日ひまち

遷宮せんぐう非神祇詞ひしんぎし

元方げんぽう○年徳ねとく○男山おとやま○

佐保姫さほへ竈田かまど姫ひめ橋はし姫ひめ○

竜神りゆうじん龍宮りゆうぐう○放生川ほうじやうがは○

勢せえ○山伏さんぶつ○榊せき

上己じょうきのの榊せき

尺教しゃくけうのの詞し佛像ぶつぞう。木像。座像。立像。

後像ごぞう。○元祖げんそ。開山。祖師。本尊。○門跡かどあと

院家いんけ○國師こくし○僧祿そうろく○

禪師ぜんし律師りつし長老ちやうらう上人じやうじん和わ

尚しやう○西堂さいだう東堂とうだう○首座しゆざ

藏主ざうしゆ典主てんしゆ書記しき行堂ぎやうだう僧そう

正しやう僧都そうと法印ほふしん法眼ほふがん法ほふ

橋はし阿闍梨あせり檢校けんぎやう法師ほふし

法躰ほふたい禪門ぜんもん入道にゅうだう發心はつしん

新發意坊官比丘比新發意坊官比丘比

丘尼居坊主坊房と心也

碩學僧老僧。福若僧。福

出家沙門僧。貧修。美修。小修。客修。薦修

素門釈氏沙弥寺律

堂古。桑古。古。荒古。祿古。山古。里古。祿古。古内。念仏古。三井古。清見古。初殿古。鄂波古。塔中。次古。古家。後堂。古堂。越堂。茶堂。岑堂。尺加堂。羅浮堂。護堂。珠陀堂。

伽藍塔三重塔。三重塔。の塔。洞塔。峯塔。尾上塔。石

輪藏回廊重塔。九輪

大客殿厨眠藏居

士行人山伏輪宝頭

陀袈裟珠數念珠

帽子花血鈴百八。之の玉

拂子印むまぶ能化

修行導師喝食

鉢叩看經五輪卵塔

素結十徳頭襟篠懸

金剛杖松杖喚鐘寫鐘

鏡鉢鱧目木魚瑠璃

經帷子鉢の米談義法論

座禅灌頂布施論義

施我鬼功德因果地

獄流轉三界十界

宿業○常香燒○五山

法問くもん引導いんどう觀念くわん悟道ごどう

陪堂はいどう○齊時○茶湯ちやとう○

廻向くわう○彼岸びなん○命日めいじつ○

迎雲いよううん紫雲しうん○位牌いはい○六

道みち○菩提ぼだい○持戒ちけい○外破

道みち○就響しゆきやうの山のやま○室戸むろ○

閑伽かんが○三の車さんくるま火宅かたく○

禁足きんそく○諸佛しよぶつ名な菩薩ぼさつ名な

祖師そし名な○夏花げか○交中かうちゆう○

書しよ○花かつむつむ○交かう○天盖てんがい賓ひん从じゆう

魚うま三具足さんぐそく華幔けまん九品くじゆうひん

の臺だい非尺教詞ひしゃくけうじ鐘かね○高野たかの

山日枝山愛宕

戀の詞

恋は定まる初を但夕休
を以て定むべし終まで

古人恋の二句めあはらひとよそ
あり是ハ三句の目より附こらお七
くなる時は泪は恋と描き
てお夕の啼と遊らあり

恋。別。一。忍。一。恨。一。待。一。此待
一。思。一。此思。一。絶。一。絶。久。一
。憂。一。契。一。此飽。一。新枕。
恋の奴。恋衣。恋茶。恋の病。
恋の山。恋の岡。恋心。恋
の海。恋の風。恋の垂糸。○思

。抱里ひ。里ひ川。里草。うさお七
ひ。裏里ひ。里ふ人。里さ里ひ。里
ひの山。片里。ささめ里ひ。里ひの畑
。あひ里ひ。里ひのけ。ほいなく里ふ
。思ひ。○情。ふけの情。うき情。涙
目。○情。さ情。さ情。情さう

くる。つ。泪の泪。涙の海。袖
らさ情。泪の涙。袖の露。床の泪

山浪やまなみ 唐突たうとつあり男女のが

望夫石ぼうふせき 昔むかし負女おんなありその夫役おとこ

又また赴おもむく弱子じやくしと携たづなひて銭ぜにして武昌むせう

北きたの山上やまの上又また送り立たて屋やして化まじして

石いし 望夫ぼうふ揚あ望夫ぼうふ未まあり 相思草しんしやうそう 是こゝ

婦むすめと夫おとこと慕こぼひて是こゝ ○領巾りやうきん 魔ま

山やま 肥こお松浦まつらあり左ひだり 石いし 彦ひこが妻つま依よ用もち媛ひめが古ふるき

允風いんふう 郎らうの婦つまとちる允いん出でて出でる

風かぜ ○手児名てこな かつらやまの石いし

下した総そう葛くわ飾しやく初はつ末まつ同どう郎らう中ちゆうの英えい女にょこ

或あるハ云いふ子こ見み名なハ武ぶ後ごの方かた言こと女にょの

惣そう称しやうあり ○夫おとこ 世よハ赤あか玉たまの方かた云い

伊勢物語いせものごと ○夫婦ふうふ 相あかひひよつ

と称しやう ○聾もう入い嫁よめ娶むす婚こん禮れい 女にょ

郎らう。貝かい桶づく ○媒まへ。氷こ人ひと。月つき老らう又また

御ご 御ごハ女子こにょ ○房ふさ 寢ね亦また之の関せき云い

洞房どうぼう 洞房どうぼう兩りやう株かぶ合あ飲いん花か ○翠すい

帳ちやう紅こう閨けい ○肉屏にくびん 房ふさ中ちゆうよりハ

人ひとの名な美人びじんと画え 是こゝ漢かんの元げん

王照君わうてうきんハ胡地小嫁こちせうよめ 是こゝ王わう

故事こじあり ○返魂へんこん 是こゝ魂たま云い

香かう 武帝むていの夫人ふじん李り ○香かう 薰物くわんぶつ

待まち。黄熟香わうじやくかう。十種香じゆしゆかう。麝香じやくかう。三夕香さんせきかう。吴越香いごえかう。沉香せんかう。國馨こくかう

香。小香。香。位吉香。百和香。寄南香。伽羅。赤梅檀。宗舟。香。及。物。多。大泥。派氏。香。香。机。香。盒。香。匙。掛香。白。袋。袋。番。香。南。三。つ。り。香。の。衣。守。

宮の識。むしりの血を女の肘に

を。その人。樹の。さ。ま。男。と。ま。る。もの。ハ。士。誤。こ。も。そ。く。ハ。鈍。小。て。俗。よ。お。そ。田。一。れ。を。い。い。か。め。一。妹。拜。ゆ。く。女。の。許。一。紅。絹。紅。指。と。衣。と。ま。る。ゆ。く。を。念。一。紅。粉。を。故。よ。この。名。あり。と。よ。一。紅。粉。

的。黛。眉。掃。男。色。年。稚。

密。男。於。曾。の。風。流。

を。その。人。樹。の。さ。ま。男。と。ま。る。もの。ハ。士。誤。こ。も。そ。く。ハ。鈍。小。て。俗。よ。お。そ。田。一。れ。を。い。い。か。め。一。妹。拜。ゆ。く。女。の。許。一。紅。絹。紅。指。と。衣。と。ま。る。ゆ。く。を。念。一。紅。粉。を。故。よ。この。名。あり。と。よ。一。紅。粉。

酒。さ。田。を。林。よ。あ。ぶ。ま。さ。り。う。ら。ん。ど。も。と。り。ふ。あ。う。ま。い。げ。や。と。笑。ふ。老。の。も。ま。う。ら。し。り。附。あり。と。ま。る。を。人。の。廊。う。ま。い。と。見。る。附。よ。て。句。中。は。遊。興。の。こ。と。

女。房。女。房。男。房。元。宮。人。の。称。を。支。ま。の。妻。

妾。外。婦。女。貴。房。と。ま。る。女。房。と。ま。る。妾。外。婦。女。貴。房。と。ま。る。

花。街。室。の。津。神。傍。江。口。大。碓。の。里。吉。原。板。橋。の。里。香。原。の。里。杉。所。の。里。

青。樓。妓。門。妓。女。所。こ。と。ぞ。家。娼。門。の。揚。屋。浮。身。の。宿。傳。才。の。船。遊。女。傾。城。行。女。兜。假。女。妓。女。娼。女。雛。妓。宿。阿。曾。比。出。女。夜。菱。辻。君。を。な。そ。め。一。夜。つ。ま。か。か。女。樂。娘。う。ま。の。女。ち。か。ま。の。君。

白。拍。子。了。髮。小。三。板。禿。分。衰。妓。

白。拍。子。了。髮。小。三。板。禿。分。衰。妓。

白。拍。子。了。髮。小。三。板。禿。分。衰。妓。

白。拍。子。了。髮。小。三。板。禿。分。衰。妓。

白。拍。子。了。髮。小。三。板。禿。分。衰。妓。

白。拍。子。了。髮。小。三。板。禿。分。衰。妓。

白。拍。子。了。髮。小。三。板。禿。分。衰。妓。

妓の幼穉 ○白眉神 妓院よある
ケモノの

○鶺鴒 俗まかりてとふ
妓楼の老女 ○陰

間 男色を 飛子 旅陰
間 ○金剛

○野郎 伽やらふ
に戸ふて舟ま
んぢう大坂よ

て伽やらふ又 ○亡八
茶街小極ひ
仁身礼智

孝悌忠信のハツと亡
○暁傘 元禄
ふれよ七八とハ云々

に戸吉原の茶街中後朝雨ふまで
傘と交まると暁傘と其角
が不とき暁傘と

○神媒 ○
哭をそりともる是あり

形見 ○かまこの肩○くまの髪○か
まこのみ○くまの帯○かこ

子 ○悋氣三ころ
○肌ふる ○共白髪 ○縁 ○う
み ○えん結び ○浅き ○仇くら登

爪紅 ○父無子子とせろ

は ○かいまえ 虫の印 可
びあひ 心男小こ ○

屍目つらひ 可うとやま 忘
らる 古さる 可あろざ

近まより 非恋詞 後家
賤女市女下女 桂女

無常の詞 哀傷とあま
まの哀さるる

塩干山 あぐせ 鳥辺野

の烟 舟岡 ○茶毘場 火葬
茶毘の烟 無常の烟 死

出の山 死むの孫 みつせ川

無常

百十五

○三途川 ○死人 ○志ある人 棺

○野辺の送り灰

よせ ○墓 ○おくつきの墓

中陰四十九の餅 魂結び

○枕食 ○自殺 ○魂よむ

害 ○白骨 ○冥途 黄泉

服切 幽霊 ○亡鬼 骸骨 ○せび

ろ ○ぬるす 枕 ○ふるまふ

辞世

述懐之詞并懐舊 往昔

は ○むらじ人 ○むらじ怪 ○いふへ
の多 ○多の泣 ○むらじの友 ○志の
ふ昔 ○むらじのま秋 ○ソは ○老
の泣 ○志ある者 ○志のふの志

老の命 ○そりめの志 ○志の松 ○志
かすま ○こころむらじむらじ ○老翁 ○こまひ

老翁 ○年寄 浪人 ○生死

白髪 命 ○後家 後家 ○憂

世 よの世の世 ○親子 兄弟 ○世 世

帯 ○姥 ○隠居 隠居 遁世

苔の袂 苔 ○黒染 眉の霜

侘住 捨る身 ○零落 家

と賣 賣食 其の目 ○

古家 摺切 不仕合 傍侍

借金 借取 ○年忌月

忌 遠忌

非述懐詞 釣公翁 釣人 賣炭

翁かづ○賤山○愚げん尉ざう座頭

警けい女にょ○病びやう○草くさの菴あん

柴しばの戸と

人倫にんりんの詞ことば雲うみの上うへ人ひと○

武士ぶし士しのまを付つくハシハシ侍ざむらい兵へい郎らう

等ら○葵あひ者もの使者しや醫師いしや醫師いしや

佛ぶつ師し繪え師し鑄ちゆう物ぶつ師し

儒にう者もの者もののまハシハシくく僧そう

○法師ほふし○山やま伏ふく○農のう人ひと○草くさ薊あざみ○商かう

人ひと○所ところ職しやく人ひと○伶れい人ひと○藝ぎ

者もの○翁おきな姥ばあ六む尺せき伯はく樂らく

者もの○番ばん太た獵りやく○獵りやく師し

舟ふね人ひと桂けい女にょ至いた身み我われ獨ひとり他た

関せき守しゅ田でん守しゅ法ほふ巳し苗めう代たい守しゅ

綱なう代たい守しゅ○月つきのあは

○家のあはあは○家のああ○亭てい主しゅ兄けい

姉あね妹いもうと海うみ士し民たみ狂くる人ひと御ご乳にち

母はは○衆しゆ徒と樵せう夫ふ鷹たか匠しやう警けい

女にょ盜たう賊そく○山やま盜たう○祢ね

且かつ○若わ君きみ臣しん下げ恋こひの君きみ

嫂せう妻さい長ちやう者もの伯はく父ふ伯はく母ぼ

祖そ父ふ祖そ母ぼ姑こ舅きゆう娘むすめ姪ひこ

孫まご○児こ尉ゑい御ご傳でん母ぼ御ご師し

能のう太た夫ふ任にん丁てい道だう心しん者もの屠と

兎男女「友達」内儀「師匠」
唱食「同宿」博士「酒醉」
張

非人倫詞「東宮」皇女「阿跡」

公家「帝」親王「宮女院」本

院「仙洞」新院「太子」大君

人間「入道」山姫「仙人」長老

二門「一家」六親「奉行」雜

式「給仕」典藥「下戸」眷属

「祖師」我君「橋姫」本道

「外科」老若「俗大勢」勢

樹「人形」龍本流耳「啞」盲

目「代官」目代「目付」月

と友「花」と友「月」とあるは

とくまも法もまゝともよ屋の
まゝりまゝ人稱よあらまゝこ

居所之詞「家」○家居○住居「門」○小家○古家

戸「背戸」窓「部」格子「障

子」殿○窓の内○窓の窓○窓の作○
窓の窓○窓の窓○窓の窓

どの ○樓○樓工 ○宿○宿工

よもぎふの省○省の板戸 ○屋

あづまや○まろや○まろや○かりや○
まや○まや○まや○あづまや○ひこつや

城「天守」亭「玄關」屋形「開

路地」棟「軒」柵「床」庵

里「村」天井「廣間」見世

「部屋」廊下「臺所」座敷「壁」
「居間」母屋「湯殿」納戸「屋」
「根」欄干「築地」垣隣「藏」
「椽」火燧「坪内」鴨居「圍」
「爐」箆の子「罎」爐裏「礎」
「簾」井筒「走」疊「暖」簾
「外面」番所
「非」居所詞「寺」室の戸「築山」
「堂」皇居「内」裡「塔」伽藍「方」
「丈」宮社「眠」藏「柱」庫裡
「辺」土「竈」火燒屋

夜分之詞 神樂 日待 明星

七夕「夢」夢想○天「梟」稻○天
「妻」宵やこあやぐ「五月」よ
こゑ「三月」月の入「明方」有
「明」錢「東」雲「暗」○霰走「挿」
頭かの綿わた○住吉すけの市いち○炬火くわ
「灯」籠「挑」燈「行」燈「燭」臺「燭」
燭ろうやも「び」○漁火いさな「花」見
「埋」火「家」更かへて「まどろむ」ま
「寢」かじく「書」はて「床」
「狐」○照射くし○蚊遺火あし「篝」
「別」の鳥とり○鶯うす「鼠」蚊あし「名」の
「寢」○苔筵かき「あ」結むす「東」雲あそ

蝙蝠ふつう「螢」鵜舟ういふね○あぶら火
短檠たんせう「送り火」○油あぶら續つづ油あぶら突つ
「即」ぬぐと「轉寐」起おき衾ふし枕まくら
「埤」鐘かね「深更」○紙かみ燭あかり「手燭」
初鳥はつとり「鵜川」規わづらひ狩かり網あみ代しろ床とこ
衛士ゑしの焼火やきび「燎」ほ竜りゆう灯あかり○星ほし
と唱とな○追お難がた○産う女むすめ「化物」
「夜叢」辻つじ君きみ

「非夜分詞」法灯ほふちぶんご「鐘霞」泊とど夏なつ
神樂かみがら「その曉」あけをもらせ夜よ「焼」
火あひ「芦火」御火みび焼やき「常」の燈あかり○
夜と待月よとまちづき○明あきとつる。明果あきぬ
明あきとつる

○あきの月つき「けふの夜」朝あさ朗らか入い相あひま
座ざ禪ぜんの床とこ「泊狩」○一夜酒いちやさけ
泊舟とどふね○夢ゆめ幻まぼろし
現ま

山類の詞

山やま「嶺」嶽たけ「岡」岨せき「坂」谷やま尾お
上うへ「高根」麓ふもと○瀧たき島しま「棧」松まつ
木き「炭」竈かまど山やま姫ひめ山やま督とく「浮島」
小島こしま「小塩」山やま梨なしの類るい山やま鳥とり
の類るい○山やまはある関せき。空そら坂さかの
関せき。不破ふたの関せき ○五山ごさん「葛城」
さの岩いわ橋はし。
久米路くみちのと

非山類詞非山鷺の峰鷺雪山雪島島

國淡路島山科の宮○富

士川竜田川○木曾路鈴

鹿路小野吉野吉野岩橋岩橋

瀧津川初瀬三島岩屋宇

治の川島○山人炭焼瓜水

新山賤仙人下野猿越

路

水辺の詞海浦濱江湊

渚島沖岸堤沼汀川

水淵瀨洲滝泉井溝

寄淡潮汐波氷流舟

橋筏綱釣清水橋關筏

伽氷柱○温泉塩燒浮伽

水釣瓶下樋浮桶蛸壺水

海士狸々和布の類○龜

水鷄守宮水鳥千鳥都

鳥鳥鷓鷓藻藻住虫魚鱗鳥

の類○橋姫夏神樂放生

會○御稜會○月の氷御稜

月月の玉玉はは○澄漂月

水水屑屑蛇籠蛇籠○藻蓮水岩

濱荻杜若濱菖蒲荻真杜若

薦萍菱流水○氷魚薦

田井「柴漬」亀井〇里の
蟹「水主」せうらき「湾」やみ「住吉神」
「三井寺」清見寺「志賀の
松」大津「明石」粟津「須戸
松島」三「由」小島「難波
津」浦「ある」関「穴瀬」濱木
綿「非水」辺詞「難波寺」志賀
「住吉」大井「粟つが原」天の
う「兒橋」泪川「みつせ川」夢
の浮橋「高津の宮」白川の
関「月の水」軒の玉水「布曝
を」室のハ「句」詞の海「田の

筧「苗代」〇「菅屋」横川「小
田の梯」霞のう「硯水」さ
の「渡」〇「管」せけ蓮肉「蓮の上
契る」〇「岩舟」くもり貝「淀
思ひの淵」松浦姫〇龍「干
魚」干貝「乾海」嵐「天水」鵲
の橋「紅葉の橋

季よちさるる河附雜のる河

葉守の神「梅の宮」雪山「か
とあり」和泉の國「放生川
櫻川」榊が浦「柳の水」橘の
都「藤原の都」柞の木林「富

士の雪「菜つみ川」鹿の角「藻
よ住虫」鳩「この虫」かつむ
り「鶴の巢」鳩「梟」都鳥
「玉ひり」かどす「雲雀毛の
駒」黒牡丹「干魚の類」櫻
「柏」棕「干種」菜「畠」柴「末
摘花」空蟬の君「落葉の宮
「薄殿」茶の花「香」菜飯「菜
汁」いけ栗「梅干」煮梅「干
わらひ」いり豆「鳩の巢」經
帽子「野遊ひ」頭の雪「眉
の霜」梅壺「柳橋」箏笠「網

代屏風「細代車」黄泉「詞
の花」花娘「花聲」花の帽
子「花田」花うつと「茶ゆり
浪の花」茶のまこ「茶む
ら」花子の狂言「花の帯」茶
かいらき「造り花」茶かつ不

「花丁子」花山の文をよと入るはらゑ
ものあり

春の月「月花」臙月夜「臙
影臙とむらり八月よあらしが
臙の夜とよもおれど

夏の月「鉾の月」夏の夜の霜

秋の月秋よもまろ
よまはる「月の雪

月のまやろとさよとま
ふもんのよはあらしが
月の霜あま
因ど

但云ハ秋七陰ものさきハ句
よりりてふものともまり
夜分よ

阿ある秋の月三ヶ月出い々いの

月「朝の月」昼の月「暮の月」

「夕月」繪えよかる月上旬の月

てハ花分はなぶんあり也。下旬の月
入るじてハ花分はなぶんあり也
月の

字あ合ある時秋月あきづき用もちる分

「玉兔」玉蟾ぎよつぎかはら男おとこ常娥じやうが

「嫦娥」盃さかづきの光ひかり「盃さかづきの影かげ待まち

宵よるの影かげ「いさよひ」有あ明あき

ゆらゆら男おとこ

冬月ふゆづき寒月さむづき「さむる月」月の

氷こおり 呀やる月つき之水みづ辺へ
ふハあり也

雜あの月つき心こころの月つき「胸むねの月つき」

夏の正花なつしょうか余花あまなはな「若葉わかしづの

花はな小杜鵑せうとく「花はな秋あき」
花はな小杜鵑せうとく「花はな秋あき」

くま
り

秋あきの正花しょうか花火はなび「夜よる花はな相あひ」

撲う 植物しょくぶつ「花燈籠はなとうろう」
あらし 夜分よるぶん。

○灯籠とうろう植うゑ
物ものあり也

冬ふゆの正花しょうか帰花きか「平ひらあり也」

「餅花もちか」植物しょくぶつ會あひ敷し
小こ二に勺すく去き 雜あの正花しょうか

作り花つくりか 植物しょくぶつ「繪えの花はな」
あり也

結びむす 道みちりる糸いと「花はな真ま壺か」
あり也

之この花はな「花はな鞆たもと」
あり也

物よあ **「花塗」**花かひらざ 鮫

らま しもやうあるは **「茶の花香」** 食

の香は **「花子の狂言」** 人海 **「燈火」**

花 魚 **「花鯉」** 食 **「花毛氈」**

「花の種」 **「花筵」** はれ句体よ

くも毛種或は茶と **「詞の花」** 去

二句 **「声の花」** **「花やま」** 去

「花やう」 茶の字に終まども和訓

とふ説あり **「花紅葉」** **「雪月花」**

雪月花八月望の望と持て **「雑」**

系物な **「花實」** 上

「非季の詞」 電

「橘の類」 **「橘の葉」** **「橘の**

「水」 **「橘の浦」** **「橘の河」** **「橘川」**

「詠訪祭」 此祭年七十余交あり

「藻小をむ虫」 むらさき

「黒牡丹」 劉訓古事

「切字」 **「林のひのうか」**

「七かひ」 欲得

「治定の哉」 うへの詞を

「引きてのや」 近

「治定のや」 上

「可うかひのや」

「去」 百廿五

表十四句裏八句。百韻の三の一抄
按ると七十二句と云るは

○四十四候の式 表八句裏十四句
名抄表十四句裏

八句。百韻の初抄と名抄
の二抄よて四十四あり

○五十韻 表八句裏十四句表十四
句裏十四句。百韻の二

の裏と云ふも五十韻といふ七十二
侯五十員四十四といふ花月の定
する額

又因ト

○歌仙之式

表六句 五句め月
の定坐 裏十二句 七句目
月十二

句目 表十二句 十句め
月あり 裏十二句 月
花

○源氏の式

表六句 五句め
月定坐 裏十二句 七句
め

月十句め 表十二句 十二句
め 裏十句

二句 月花
目あり 表十二句 あま
目 裏

六句 五句目月の定坐の源氏ハ
この抄を歌仙に加へる

表裏よて二十
四句と云ふ

○長歌之式

表八句 七句
め月 裏十六句 九句目
月十三句

め 表十六句 十五句
目月 裏八句 七句
目花

○短歌之式

表四句 裏八句 初句日月
七句め花 二表

八句 七句
め月 二裏四句 三句
目花

○長歌のハ四抄よて四十八句之短歌行
三十四句之長花坊支考と作らるるといふ

○箴 表六句 五句
め月 裏六句 五
句

目花表六句と裏六句といふ
二十八句なりといふ

○首尾 表六句五句 裏六五句

句五句め 〇三物幾句服

句數同季四季ともよ 春秋二句去之

三句より多句までつく「夏冬」二句より

二句より多句までつく「戀」二句

五句より多句までつく「神祇」二句

句木折端より出づるあげ句より

句「無常」二句去

句「述懐」三句

句「山類」一句より

句「人倫」二句

句「居所」二句

句「水邊」二句

句「天象」二句

句「植物」二句

句「衣類」二句

句「名所」二句

句「國名」二句

句「降物」二句

句「簞物」二句

句「天象」二句

句「植物」二句

句「衣類」二句

句「名所」二句

句「國名」二句

句「降物」二句

句「簞物」二句

句「天象」二句

四季の持扇終

持扇跋

黃鸝嘆老杜鶻翔壯黃梅
天間居愛無事親四友蕭
然消日矣俄一書賈捧帙
而進啓視之乃俗稱俳諧
季寄者而卷末併載白雄
之苗代水一書蓋源出於
年浪草而汲玄同之歲時
記下流以別爲一支川者
也然其源流悉非清水而
濁水交有流傳宜不捨捨
謬損味惜哉這書隨流沿
習而不擇清濁啻爲備習

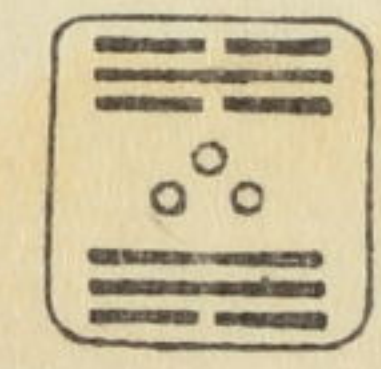
學之便覽乎既刻成無如
 之何ヲ要ニ知ル其事々々物々之
 正誤者有積讀書之功焉
 出格亦可有其期余爲書
 賈聊訂正文字誤脫而一
 時煩机上之四友ヲ加勞ニ午
 方先生而已

昔

慶應歲次丙寅天中節日

江都萩原乙彦識於葛

本



誹諧苗代水

冠体當五七五の言程此道不
 存ぶ初心の言程が長あゆみ
 して先四季の題と探り句を
 作ふんとあふまふあふまふ
 らそ。梅の花。朝。秋の風
 評あつたむの朝の冠ふを
 ちまひ借ふを。ややく侍の七
 文字を自定して考ふ。時を必上
 歌を空くばつた文字を亦考へて
 一句の意を。序歌曲とさ
 む。二字三文字ののりあり。花
 。花。月。中。の。雲。霞の秋
 。花。足。外。と。月。小。碎。と。数
 。花。雲。の。秋。小。又。ま。と。定。花
 体。の。七。字。と。考。合。と。後。小
 符。を。定。て。句。作。と。さ。此。冠
 体。當。あ。る。言。す。り。每。量。の。句。を
 ら。む。事。あ。け。て。う。さ。か。て。能
 は。書。と。あ。の。り。と。な。言。さ。書
 く。意。彩。く。作。さ。ふ。あ。わ。ら。し
 神。変。妙。の。名。白。屢。たり。如。傳
 此。乃。少。存。ふ。ま。ふ。あ。ふ。ま。ふ。は

苗代水

志帆片帆
 合帆の
 知人小
 舟外く
 海山も
 軒ちり
 思ふ事
 里の
 舟の
 新庵の
 生あ
 あき
 川淀也
 月の
 明る
 古の
 一筋
 小舟
 うさ
 僕さ
 とも

宿りて
 魔の
 各
 傷
 身
 妹
 虎
 凡
 古
 物
 美
 君
 期
 文
 婿
 御

体七言
 同
 舟
 人
 何
 何
 何

苗代あり
 三

ついでにゆくあきとて... 思ひぬ
 物亦あ... 五言目の附
 安きと... 皆此を
 ぞぬて... 正しく
 意味を... 人の物と
 けんと... にあつる
 まこと

○表六句

梅の香... 味... 秋... 月... 雉子... 秋... 梅魂... 五体

○同

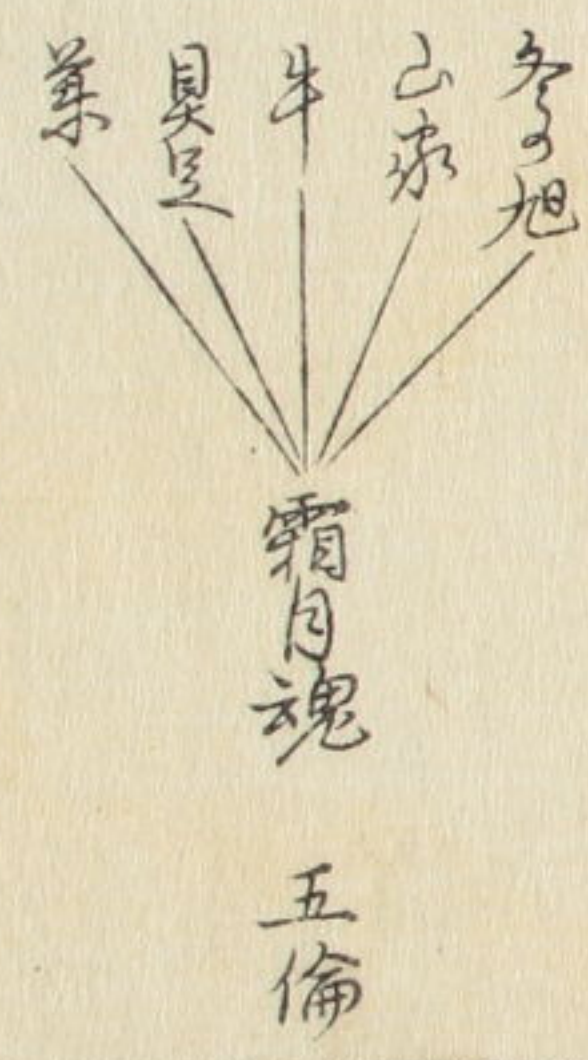
木枯... 梅... 秋... 月... 雉子... 秋... 梅魂... 五体

花の... 梅... 秋... 月... 雉子... 秋... 梅魂... 五体



○同

冬... 梅... 秋... 月... 雉子... 秋... 梅魂... 五体



○轉方

為代

荷持はとうふ
 船出は其れ
 舟楫と不整を
 管て月を
 あけおのる

五言

隠ししよ
 めのりしよ
 斤乃を
 竿竹ふ
 依りすう
 物どは
 降しあ
 尾将し
 店さか
 侘なれ
 波おろ
 船とて
 唇あま
 乃さく
 志のぶ
 洲さく
 うまの

同

あそりしよ
 おのりしよ
 ふあう
 日此あ
 さくく
 多か
 せち
 むさ
 うの
 世不
 痛
 世の中
 いら
 らう
 やち
 お
 手

あがん
 甚
 馬
 碓
 障
 号
 道
 面

冠五言

同

山
 歡
 其
 縁
 油
 股
 新
 大
 加
 入
 下

のどけりや 引すし 夜 後 月 夕暮 さ 涼しや 少 小 ぬ 春 一 下 木 む 夕 存	夕 暮 涼 け 山 川 也 面 涼 け 夕 暮 涼 け 山 夕 暮 涼 秋 夕 暮 涼
---	--

沓五言 同

鼓 立 了 宿 ありて 羽 ありて 夾 ありて 拾 ありて 川 ありて 舟 ありて 物 ありて ふ ありて 春 ありて 啼 ありて お ありて う ありて	後 夕 暮 涼 春 ありて 夕 暮 涼 け 夕 暮 涼 け 夕 暮 涼 け 夕 暮 涼 け 夕 暮 涼 け 夕 暮 涼 け 夕 暮 涼 け 夕 暮 涼 け 夕 暮 涼 け 夕 暮 涼 け 夕 暮 涼 け 夕 暮 涼 け
---	--

新 こと ぬて あ ありて 冬 ありて 中 ありて 後 ありて 通 ありて 有 ありて 春 ありて	夕 暮 涼 け 夕 暮 涼 け 夕 暮 涼 け 夕 暮 涼 け 夕 暮 涼 け 夕 暮 涼 け 夕 暮 涼 け 夕 暮 涼 け
--	--

○序題曲

元日小田毎の日を忘る
秋の夜を打寄るを忘る

○服五体 ○お添

枯枝子鳥とありたり
澁うけけり

○遠附

丹雪の意不計を忘るるの
漸 爽を忘るるの人多

○在附

秋の意不計を忘るるの
秋の意不計を忘るるの

○頃附

秋小涼を忘るるの
秋小涼を忘るるの

坊（小虫のきき）頃

○對附

きよら七重七雲伽藍八重稿
曝き所をむ三のま縁を立

○并三句法○杉形○大山

むす菫 日和定す 夜まて

松の風 波濤の聲の 通ひ来て

○十五方附方

理（甲斐文の松く方ハまきの羽衣来
致能の玉塚あり夏木を立

達（涙声も明志の軍宮中
松原ふひより玄仙を流れて

離（縁はらき物とあそび知るが
もしくとまると雨うくく）

其人（難原をハ又斬く
有公まき可き形ふまをゆく

其場（純子をとりてままのま
そのかみあり方小宮のりけ

時分（らくと云郎小繩をひき
夜ハおくと明六のりう）

時候（息女小龍文を髪をめでは
堪忍あふぬ七夕のり）

景色（又も大のり秋をたぬ
景色）

（場より甲まきまきていひよれ

向附（まきのかみを又ゆて
城中小お家のり色とあり

迎（江戸のた右向ひのきまき
こまありのきい夜向とあり

心（妹をよみありまきつり
倍部ありのき光みをゆ

響（ま細の聲地ありまき倍木
まき子ありのきれ政のき

寂（所内り秋更ありのき
何れありのきありのき）

境（軍まきまきまき二十八日
いひまきまき小軍のき）

包（ありのき一巻の白ひき
百白ハ百向ありのき）

是よりて白な 深意味
きをあらむ

右十七ヶ條畢

白雄房昨鳥著

原書有誤寫者今正此

十時蕉華庵乙彦

俳諧初學書目

俳諧寂榮

白雄坊撰

三冊

發句五百題

同撰

二冊

故人五百題

松露庵撰

二冊

新五百題

田喜庵撰

二冊

新々五百題

二冊

近十家五百題

過日庵撰

二冊

近百家五百題

二冊

文久五百題

二冊

元治五百題

二冊

安政付合集

半青居新甫著

二冊

蒼虬翁付合集

同撰

一冊

日本搦道

須原屋茂兵衛

同 二丁目

東

山城屋佐兵衛

同所

須原屋新兵衛

銀座三丁目

山城屋政吉

芝神明前

和泉屋吉兵衛

同所

岡田屋嘉七

横山町三丁目

和泉屋金左門

淺草茶町三丁目

須原屋伊八

池ノ端仲町

岡村屋庄助

上野御成道

英屋文藏梓

林

書

行

發

都

東

